

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号（二〇一七年三月） 抜刷

【特別調査報告】

西巖寺蔵「小川貫式資料」 調査報告（一）

藤井由紀子
中川剛
高木祐紀
小川徳水
工藤克洋

【特別調査報告】西蔵寺蔵「小川貫弍資料」調査報告（一）

藤井由紀子
中川剛
高木祐紀
小川徳水
工藤克洋

「小川貫式資料」 調査報告にあたって

歴史学は、歴史資料（史料）に基づいて考察を進める学問である。過去にどんなことが起こり、社会がどんなふう発展してきたのか、歴史資料に沿って探究する学問だと言い換えてもいいだろう。つまり、新たな資料をどう発見し、あるいは、既存の資料をどう解釈するかが、歴史学発展の大きな鍵となるわけである。今回の特別調査報告では、この点において、一つの大きなチャレンジをしている。新しい資料の開拓である。その調査対象は、岐阜県各務原市の西厳寺に蔵されていた、中国仏教史学者、小川貫式（以下、貫式と略称）の自筆原稿を核とする資料群であるが、平成十八年（二〇〇六）まで存命していた人物の残したものに、歴史を復原するだけの資料的価値を、はたして認めることができののだろうか。

調査開始のきっかけは、昨年三月の西厳寺訪問である。昨年度、研究所主催の法隆寺一切経の展覧会に関連して、これに足を運んでくださった西厳寺住職小川徳水氏のご厚意で、大蔵経の研究者であり、経典類の蒐集家としても知られていた貫式のコレクションを拝見することが、その主な目的であった。ところが、その経典類もさることながら、徳水氏から「こんなものもあるんだけど」と目の前に出された、貫式のある遺稿に釘づけとなった。なぜなら、右下に「陸軍」と印字され、赤い罫線で仕切られた便箋に、丁寧な筆跡で調査の報告とおぼしきものが、

びっしりと書きつけられていたからである。それは、貫式が日中戦争下、中国に留学した時の調査記録の一部であった。われわれは即座に資料となりうる可能性を感じ、西厳寺に残されている貫式の自筆原稿を「小川貫式資料」として調査に着手することをその場で申し出たところ、徳水氏によってそれが快諾されたのであった。

調査チームは、研究所の所員藤井のほか、客員所員・客員研究員の中川、工藤、高木の四名で、途中から西厳寺の現住職であり、貫式のご長男である徳水氏にもチームに加わっていただく僥倖を得た。調査の方針としては、中国留学時代のものだけをピックアップせず、西厳寺に残された貫式の自筆原稿はすべて「小川貫式資料」として扱い、貫式の研究者としての全貌の把握につなげることにした。写真など、細かいものも含めれば、千点近くもある「小川貫式資料」であるが、これまでに五回の調査に赴き、写真撮影と計測を行いながら、現状を観察し、分類整理を進めてきている。しかしながら、資料の数が想像以上に多く、現在もなお、基礎調査の段階にある。したがって、本報告にも資料目録は未掲載である。

ただし、今年度、十二月には、調査の経過報告を兼ねて、「戦時下の中国仏教研究―西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録」と題する企画展を、同朋大学のギャラリーで開催し、この「小川貫式資料」の資

料的価値について一つの方向性を示した。中国留学時代の自筆原稿のうち、山西省に関する資料約六十点を抜き出して、展覧会を構成したのである。その結果、中国史、チベット史、モンゴル史、そして日本近代史など、各専門分野の研究者の来場もあり、高い関心を寄せてくださる方々もあつたことから、その展覧会の内容をベースにして「特別調査報告(一)」を作成し、今年度の紀要に掲載することにした。

本報告の構成であるが、総論を中川が担当し、「小川貫弑資料」の概要について記したほか、各論として藤井が今回の新出資料に基づいて、日中戦争下の五台山について論じている。さらに、貫弑の留学時代の原稿のうち、未発表であり、かつ、戦時下における貫弑の調査研究の具体相が明らかになる、太原の崇善寺での四種類の調査記録類を、巻頭口絵で紹介するとともに、小川と高木とでその内容を翻刻し、藤井がそれに解題をつけて史料紹介とした。また、報告の末尾には、参考として貫弑の略年表も示している。なお、今回、工藤は執筆を担当していないが、「小川貫弑資料」のWeb上での学術公開に向けて、デジタルアーカイブスの設計・デザインに携っている。

いずれにせよ、調査研究はまだ端緒にいたばかりである。また、本資料群を分析するにあたって、調査の構成メンバーは必ずしも専門性を持ち合わせているとはいえない。しかし、地域とのつながりのなかで発掘された資料を活用することで、地域と大学とを文化面から結びつけていければという考えのもと、調査に着手し、その資料的な価値づけを敢

えて試みた次第である。むろん、そのためには、宗派上のセクトや学問上の専門を越境して研究に取り組む必要があり、結果として、本報告の内容にも、誤解や誤謬など、多分に力不足な点があるかとは思いますが、今後の調査の充実に向けて、「小川貫弑資料」をぜひ知っていただき、各専門の研究者の方々より広くご意見、ご叱正を賜われれば幸いです。

注

- 第一回調査 平成二十八年三月三日
- 第二回調査 平成二十八年六月二十六日
- 第三回調査 平成二十八年七月十五日
- 第四回調査 平成二十八年九月二十二日
- 第五回調査 平成二十八年九月二十六日

新出の西巖寺蔵「小川貫式資料」について

中川 剛

一 はじめに

近代以降、日本の中国仏教史の研究は大正期に本格的に始まり、昭和期には、仏跡調査を伴った多くの中国仏教史に関する論文が発表された。^①この時期の中国仏教史研究の特徴は、満州事変以降、国家や軍部との提携において発展したことにある。本稿で取り上げる小川貫式（一九二二年—二〇〇六年：以下貫式と略称する）は、戦後、龍谷大学教授となり、退職後は同学の名譽教授となった中国仏教史の代表的研究者であるが、彼もまた、昭和十四年（一九三九）、浄土真宗本願寺派の興亜留學生として中国に渡り、丹念な仏跡調査を行った経験を持つ。

貫式は、生前、膨大な蔵書や調査資料を蒐集しており、これらは現在も西巖寺に蔵され、「西巖寺橋資料」や「清光山西巖寺蔵和漢古書目

録」「西巖寺小川貫式蔵現代史資料集成」として、論文や冊子等に発表されてきた。これに対して、今回、新出資料として紹介するのは、貫式の自筆原稿と、スクラップブック六冊に貼付された中国留学時代の書簡・パンフレット・写真類である。これらは、貫式の龍谷大学在学中から、中国留学を経て、龍谷大学教授、龍谷大学図書館長となり、退職するまでの約五十年間のものであり、スクラップブックに貼付された細かいものも含めれば、千点近くにもなる。同朋大学仏教文化研究所では、今年度よりこれらの調査分析に着手しているが、本稿では、この新出資料の調査の意義を示すためにも、まずは西巖寺において、過去のような調査が行われてきたかについて、簡略に紹介していくことから始めていくこととする。

二 西厳寺所蔵の資料調査

平成十八年（二〇〇六）九月、貫弑が亡くなった直後から、長男の徳水氏の呼びかけで、龍谷大学名誉教授・小田義久氏を代表として、有志による「小川貫弑先生貴重書研究会」が編成された。この研究会では、貫弑所蔵の古写本の断簡や「西厳寺橋資料」、これは第二次・第三次大谷探検隊員であった橋瑞超から貫弑へと寄贈された探検隊収集資料であるが、こうした古資料類について、大木彰氏、橋堂晃一氏、吉田豊氏の諸氏が中心となって調査・研究がなされ、『東洋史苑』第七〇・七一合併号「故小川貫弑先生追悼号」に、「大谷探検隊収集「西厳寺蔵橋資料」について」として、その成果が発表された。また、この号では、貫弑への追悼文を含め、詳細な略年譜・著作目録などが収められた。

さらに、小川貫弑先生貴重書研究会では、この作業と並行し、デジタル資料として平成二十年（二〇〇八）に二枚のCD-ROMを作成した。そして、「西厳寺蔵橋資料」「古写経断簡集成」をA版に、「小川貫弑先生著作集」をB版として、貫弑の収蔵品と刊行著作物をこれに収載している。そして、近年、平成二十二年（二〇一〇）には、「西厳寺橋資料」を調査・研究した吉田豊氏によって、『京都大学文学部研究紀要』第四十九号に「新出ソグド語資料について―新米書記の父への手紙から―西厳寺橋資料の紹介を兼ねて―」という簡易な資料紹介もなされている。

また、この西厳寺は同朋大学仏教文化研究所とも学術的なつながりがある。すなわち、平成二十三年（二〇一一）、貫弑所蔵の和本類について西厳寺に調査に入り、その結果を目録にまとめている。この調査のきっかけは、同研究所室長であった故・渡辺信和に対して、徳水氏が蔵書類に関する相談をしたことに始まっている。その後、渡辺は、高橋良正氏に西厳寺の和漢古書目録の編纂を依頼し、平成二十一年（二〇〇九）三月頃から一年半をかけ、六回の調査を経て、「清光山西厳寺蔵和漢古書目録」として、その成果が『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十一号に掲載された。なお、この調査の期間中、当学教授榎木瑞生もアジア開教に関する資料を調査しており、徳水氏はその助言によって関連する貴重蔵書のデジタル化を行い、それに目録を付けて、『西厳寺小川貫弑蔵現代史資料集成I II』（CD-ROM）として刊行した。

以上が、これまでの西厳寺調査の概要であるが、今回、新出資料として紹介するのは、これらの調査では注目されてこなかった、貫弑個人の中国仏教史研究に関する自筆原稿・写真類である。

三 小川貫弑の生い立ち

貫弑が龍谷大学研究科に入学した昭和十年代は、中国仏教の研究が飛躍的に発展し、京都では京都大学・龍谷大学・大谷大学が連携して、雑誌『支那仏教史学』（昭和十二年―昭和十九年）が発刊された時期でも

あった。また、後述するように、貫式が学んだ龍谷大学でも、昭和八年（一九三三）四月、史学講座から仏教史学の講座が分立し、『龍谷史壇』が発刊されるなど、仏教史が活況を呈していた時期でもある。浄土真宗本願寺派布教使であった父・貫練の助言もあり、貫式は中国仏教史の研究を志したというが、本章では、貫式がそのように研究を志すに至るまでの経歴について少し触れてみたい。なお、貫式の経歴については、『東洋史苑』の追悼号に掲載された猪飼祥夫氏による略年譜があるほか、徳水氏も西厳寺の寺院史および貫式の年譜を作成しており、以下、これらを参考にしながら略述していくことにする。

貫式は明治四十五年（一九一二）三月一日、浄土真宗本願寺派の末寺、西厳寺第十一世小川貫練と登美^{とみ}の長男として生まれた。同胞には上に姉の禮子があり、妹には信子と昭子が、さらに弟の貫之がいた。しかし、貫之は幼くして夭折したといい、そのため、貫式は西厳寺の住職の後継として厳しく育てられた。

貫式と龍谷大学との関わりは、昭和四年（一九二九）に始まる。この年の三月、貫式は岐阜県立武義中学校第四学年を修了し、龍谷大学予科に入学した。門徒の有志が、貫式が十歳から寺の手伝いとして月参りをした布施を貯蓄したものを学費に充てたという。ただし、このとき、彼はまだ中学校在学中で、この受験は親に相談もなく行われたらしい。そのため、龍谷大学の担当職員が父貫練の知り合いであったことから、合格手続きの猶予をもらい、直ちに岐阜に帰省し、龍谷大学への入学の承

諾を得たという。

ちなみに、父の貫練は、明治七年（一八七四）、岐阜県本巢市上保の農家、大熊喜八の次男として生まれているが、農家を継ぐのを嫌ったためか、明治十九年（一八八六）本巢市上保の善照寺の徒弟となり、明治二十二年（一八八九）に地方の本願寺派僧侶の育成機関であった岐阜・金阜教校へ入学した。三年後、大分県中津の摂受吐月勤学に師事したが、吐月が亡くなったために帰郷し、岐阜の金阜教校へ再入学した。そして、布教のため、各務原に立ち寄った際、西厳寺に後継住職がないと紹介されたことがきっかけとなって、明治二十九年（一八九六）十月、西厳寺に入寺することになる。翌年九月には、浄土真宗本願寺派の大学林に入学し、同年十一月に住職に就任した。明治三十四年（一九〇一）、仏教大学（現・龍谷大学）を卒業し、布教使として北陸や北海道などを中心に、全国を布教したという。なお、卒業と共に、西厳寺十世普観の娘、玉日^{たまひ}と結婚しているが、この坊守の玉日は十年も経たないうちに二十五歳の若さで病死してしまったため、岐阜県関市山田村の地主の娘、後藤登美と結婚し、その間に生まれたのが貫式であった。登美の実家の後藤家は、製糸工場を営み、西厳寺に金銭的援助を行っていたが、昭和初期には不況のあおりを受け、廃業したという。さて、昭和八年（一九三三）四月、貫式は龍谷大学文学部仏教史学科に入学した。大学入学するにあたり、貫式は当初、真宗学を専攻するつもりであったが、『龍谷史壇』を編集していた龍谷大学研究科の浜中寛

淳が、当時ハイカラなカンカン帽をかぶり、浴衣に袴をつけて仏教史学科の勧誘に来たといひ、それが第一の動機であったと貫式の手記には記されている⁴。また、仏教史学科を選んだ理由として、父・貫練が「布教使になるならば、中国仏教史が良い」と助言したとされる⁵。

また、同じく貫式の手記によれば、当時の龍谷大学では、禿氏祐祥・西光義遵・高雄義堅の三教授が龍谷大学の仏教史を牽引し、「この三教授のチームワークをとった指導によつて龍大の史学が華々しい活躍を上げる」時期であったという⁶。このような経緯があり、中国仏教史を専攻することになった貫式は、昭和十一年（一九三六）、文学部の卒業時には、「趙宋時代の浄土教」という論題で、中国浄土教を研究テーマに卒業論文を執筆している。つづいて、貫式は龍谷大学研究科中国仏教史学に入學するが、ここでは中国仏教史の高雄義堅に師事したとみられる。學術誌『龍谷史壇』『支那仏教史学』の編集を手伝いながら、自身の研究に打ち込み、さらには大谷大学教授の道端良秀らの輪談会にも参加するなど、充実した学生生活を送っていたようである。そして、研究科の修了時には、「南宋仏教史研究」と題した論文を、教団編と教学編の二冊をまとめて提出し、昭和十四年（一九三九）三月に同研究科を修了している。

四 西本願寺興亜留学生として

興亜留学生の「興亜」という言葉は、昭和十三年（一九六四）、近衛文麿内閣が出した「東亜新秩序」声明に始まる。すなわち、この声明以後、宗教界もこれに呼応し、この時期、各宗派・各団体が「興亜」を冠した運動や事業を行なったのである。浄土真宗本願寺派では、法主・大谷光瑞が昭和十四年（一九三九）に「興亜奉公の消息」を出し、本山ではこれを具体化した「興亜促進運動」を推進していくこととなる。当時の執行・梅原真隆は『教海一瀾』紙上で、「興亜」とは大東亜建設のために物心両面で国家に「奉公」することであると述べているが、その運動には、①「興亜促進御消息披露特別布教」と、②「興亜促進強調臨時布教」の二つがあり、①は法主の大谷光瑞の「興亜奉公の御消息」を徹底することで、同年七月から翌年三月までの期間、日本全国の教区においてこれを実施するものであった。また、②では三綱・十要が規定されていて、そこにいう三綱とは「信念確立」「興亜認識」「経済報国」であり、興亜の信念を確立し、興亜を認識し、経済面でも報国するというものであるが、その具体的な内容として、十要の「民族親和」「資源愛護」「防共達成」「満蒙拓土」「皇軍感謝」「傷病兵慰問」「英霊追弔」「遺家族共励」「銃後奉公」「生活刷新」があった。そして、こうした興亜促進運動のうち、本願寺派が重要視したのが中国への現地慰問で、留学生に関してまでは言及されていないが、貫式は手記の中で、

昭和十四年三月研究科を「南宋仏教史研究」と題し教団篇と教学篇の二冊をまとめて卒業ができた。時恰も日本は大陸進出の戦時体制

であり、本願寺において中国に開教師派遣が盛んとなるにつれた興亜留學生を募集して中国大陸の仏教事情を調査研究する必要性が認められ、北京へは三上諦聴新野修基、中支へは私と海野の二人が派遣されることになった。これは禿氏西光高雄諸教授の推薦によるものであった。⁹⁾

と述べており、貫式には自身が「興亜留學生」という立場で留学したという自負があった、と思われる。

ちなみに、本願寺派の留學生は明治初期まで遡る。海外視察や研究調査を目的として、開教師や研究者を留学させていたが、昭和十年頃から満州を意識するようになり、昭和十二年（一九三七）には、満州に「日語学校」を、龍谷大学内に「満州語学院」を開設し、満州語学院で勉強させて学部卒業生を満州に留学させることが行われた。なお、留學生については、「北支留學生」¹⁰⁾や「満州留學生」¹¹⁾などの名称があり、貫式は学部・研究科の担当教授高雄義賢の推薦をもらい、昭和十四年（一九三九）四月、「興亜留學生」として、中華民国へ渡り、南京で約二年間、北京に約一年間、研究者として調査活動をしながら滞在することとなる。

さて、この年の四月、上海に上陸した貫式は、上海別院の小笠原彰真開教総長によって南京への派遣を命じられる。そして、南京の太平路白菜園にあった西本願寺出張所の横湯通之主任の紹介で鳳山古林律寺に入り、中国僧と共に南京仏学院で教育生活を送ることになった。ここで貫

式は、「大学で書物を通じて理解していた中国仏教と現実に、中国の仏寺に入って中国僧と共同生活してみると、全くその問題が複雑で相違することを痛感」したと述べている。¹²⁾

古林律寺については、貫式の論文、「中国現代の放戒と戒疤・戒牒」で簡略に触れているので引用してみよう。

南山律寺の復興者三昧寂光の師匠である、古心慧雲師が明代の萬曆年代にいた古林庵が清代に律寺と発展して現代に及べるものである。慧雲律師がここに石戒壇を築き、律門の第一祖庭としてより今は第十八代の住持である。江南に於いて著名な律寺として毎年春秋の二期には昔ながらに、寶華山の授戒の儀礼と同じ放戒が行われているのである。¹³⁾

このように寺の歴史が紹介されているが、この古林律寺内に設置されていたのが南京仏学院で、現地の中国人僧侶に対して日本式の仏教教育を施すことを目的とした設置であったようである。興亜院華中連絡部調査機関がまとめた「南京及蘇州に於ける仏教の实情調査」によれば、¹⁴⁾この南京仏学院は、日華仏教聯盟南京総会の依頼により、経営面では西本願寺が責任者となり、同派の対支事業中より年額三千六百円の資金が当てられていたとされる。また、日華仏教連盟とは、浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・浄土宗・日蓮宗・本門本法華宗・曹洞宗といった、南京に進出した日本仏教各宗派が組織した南京日本仏教連合会を中枢として、そこに中国側の南京仏教会・蒙蔵章嘉事務所・西藏班禪駐京弁事処・中国

安清同盟が加盟したものである。高冠吾南京市督弁を総裁とした団体で、南京に本部を置き、鎮江・揚州に支部を設置していた。日本の仏教教団が中国開教に苦戦するなか、相互に助け合いながら教勢を拡大するために組織された団体と考えていいだろう。

なお、南京仏学院の生徒数は十名で、古林律寺内に合宿させ、規律ある団体生活をさせていたという。特徴的なのは、詰襟洋服の制服を着用させていたことであった。授業科目は、修身・日本語・仏教史・仏教概論・天台・華嚴・唯識・仏教論理・禅文学・仏前作法・国文習字・音楽体操を講義し、日本人と中国人の双方から職員数名と講師数名を人選したと記されている。貫式はここで主事の役職を与えられ、教鞭を取りながら、南京の棲霞山の調査を行っていたとみられる。

五 中国仏教史の発展と貫式の仏跡調査

中国仏教史の発展は、常磐大定の五度による中国への仏跡調査によって著された『古賢の跡へ支那仏蹟踏査』¹⁵⁾によって、文献学から現地調査の重要性が示された。このことにより、中国仏教史の研究者は、次々と中国に渡り、歴史的な発見が相次いで発表された。龍谷大学では学術誌『龍谷史壇』を中心に、中国仏教史に関する論文が発表され、昭和十一年（一九三六）には、学術誌『支那仏教史学』が龍谷大学・大谷大学・京都大学の教授や研究科の学生を中心に法蔵館より創刊された。また、

同年、『日華仏教研究会年報』が創刊されるなど、昭和十年（一九三五）以降、中国に関する雑誌が多く創刊された。¹⁶⁾

貫式もまた、南京の古林律寺に駐在し、仏学院で教鞭をとりながら、棲霞山の調査を再三行なったが、その成果は『南京青年叢書第1輯 六朝の勝地 千仏の名藍 棲霞山史蹟』¹⁷⁾として出版されている。その後、昭和十六年（一九四一）三月十二日には蘇州靈巖山の印光法師の荼毘葬への列席を兼ねて、同月十五日から十九日まで、杭州の日華仏教会を拠点に、昭慶律寺、靈隱寺、淨慈寺、文瀾閣をまわっている。さらに、同年七月、山西省五台山へ六月大会に参列し、帰る途中に太原城内の崇善寺に寄り、元時代の南山普寧寺版の大蔵経を発見したり、積砂版の大蔵経を実見するなど、充実した仏跡調査を行なっている。こうした成果は、『支那仏教史学』や『龍谷史壇』に掲載され、これを列記すれば、

「中国現代の放戒と戒疤・戒牒」『支那仏教史学』第四卷第三号、昭和十五年一月

「吳興妙巖寺版蔵経雜記」『支那仏教史学』第五卷第一号、昭和十六年六月

「歴代編年釈氏通鑑対校拾遺記 静嘉堂宋奩待訪録」『龍谷学報』第三三二号、昭和十六年二月

「入唐靈仙三蔵と五台山」『支那仏教史学』第五卷第三・四号、昭和十七年三月

「太原崇善寺新出管主八の施入経と西夏文大蔵経の残葉」『支那仏教

史学』第六卷第一号、昭和十七年七月

「光明禪師施入經典とその扉絵―元白雲宗版大藏経の一考察―」『龍谷史壇』第三十号、昭和十八年七月

「元代白蓮教の刻蔵事蹟」『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十九年一〇月

「磧砂藏経の西夏文字」『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十九年一〇月
となる。

このように、貫弑の中国各地での調査過程を振り返ると、今回、西蔵寺から新出した貫弑が書き記した調査報告や写真類、その他、入手した書類・土産物のパンフレットなどは、興亜留学生としての貫弑の一連の行動を明らかにする手掛かりになると考えられ、その点、非常に貴重な資料であると考ええる。

六 むすびに

貫弑は昭和十七年（一九四二）三月、助手に欠員が出たために研究科の指導教授高雄義堅に呼び戻され、同年四月から龍谷大学文学部（史学・仏教史学）の助手と中央仏学院の囑託講師を兼務することとなる。そして、昭和二十年（一九七五）から龍谷大学専門部教授となり、昭和三十六年（一九六一）経済学部増設にともない、龍谷大学文学部教授と

【特別調査報告】西蔵寺蔵「小川貫弑資料」調査報告（二）

なった。昭和四十三年（一九六八）には図書館長となり、昭和五十年（一九七五）には龍谷大学を退職し、京都の下宿先であった、妙心寺内の春光院を引き払い、各務原へ戻ることとなる。蔵書類や研究資料はすべて一間の廊下に敷き詰められていたが、春光院は貫弑の妹信子の嫁ぎ先であったため、処分されることなく、すべて各務原に引き上げることになった。

以上のように、西蔵寺蔵「小川貫弑資料」は、龍谷大学の学部生だった頃からの全ての収集物が保全されている資料群であり、これらのうち、新出資料として特に注目されるのは、貫弑が中国留学中の調査報告、写真、軍部のピラなど多岐にわたる資料群で、主に南京棲霞山調査資料、五台山六月大会調査資料、太原崇善寺調査資料の三つに分類される。今後、写真類についても、調査資料と突合し、精査していく過程で人物が特定されていく可能性があると思われる。戦中どのような方法で中国仏教史が調査されたのかということが、今後、この新出資料を研究することによって明らかになることを期待している。

註

(1) 道端良秀「支那仏教史の概説書概観」『支那仏教史学』第一卷第一号、（法蔵館、昭和十二年）、小笠原宣秀「昭和十一年の支那仏教史学界点描」『支那仏教史学』第一卷第一号（法蔵館、昭和十二年）。

参考文献

- (2) 貫式はその他にも『顕浄土真実教行証文類』の坂東本の研究で知られる人物でもある。
- (3) 小川徳水「西厳寺の歴史」(西厳寺)。
- (4) 小川貫式手記「仏教史学を志して」(西厳寺蔵「小川貫式資料」、昭和五十一年)。
- (5) 小川徳水氏談。
注4小川前掲手記。
- (6) 「戦時教学」研究会『戦時教学と真宗』第一卷(永田文昌堂、昭和六十三年)。
- (7) 「興亜精神と仏教」(『教海一瀾』昭和十四年八月二十五日)。
- (8) 「本山録事」(『教海一瀾』昭和十三年十一月十五日)。
- (9) 「龍大の二留学生と満州学院員生決る 満州国の開拓者」(『中外日報』昭和十二年三月十九日)。
- (10) 注4小川前掲手記。
- (11) 『支那仏教史学』第四卷第三号(法蔵館、昭和十五年十一月)。
- (12) 「南京及蘇州に於ける仏教の実情調査」(『華中連絡部調査報告シリーズ』第二十二編、昭和十五年五月)。
- (13) 常盤大定「古賢の跡へ支那仏蹟踏査」(金尾文淵堂、大正十年)。
- (14) 小笠原宣秀・宮崎圓遵・小川貫式・日野昭「座談会」龍谷史壇創刊五十年記念特集回顧五十年」(『龍谷史壇』第七十五号、昭和五十四年)。
- (15) 『南京青年叢書第1輯 六朝の勝地 千仏の名藍 棲霞山史蹟』(南京青年会、昭和十五年)。

- 龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史』通史編上(龍谷大学、平成十三年)。
- 大谷大学百年史編集委員会『大谷大学百年史』通史編(大谷大学、平成十三年)。
- 道端良秀『大東名著選14 日中仏教友好二千年史』(大東出版社、昭和六十二年)。
- 槻木瑞生編『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第4期 日本佛教団(含基督教)の宣撫工作と大陸』第三卷(龍溪書舎、平成二十四年)。
- 浄土真宗本願寺派国際部 浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派アジア開教史』(本願寺出版社、平成二十年)。
- 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『興亜院と戦時中国調査 付刊行物 所在目録』(岩波書店、平成十四年)。
- 小島勝・木場明志編『龍谷大学仏教文化研究所叢書Ⅲ アジアの開教と教育』(龍谷大学仏教文化研究所、平成四年)。

五台山六月大会の復興と日中戦争——「小川貫式資料」にみる五台山

藤井 由紀子

はじめに

山西省五台山では、今年も昨年について今事変後第二回の所謂六月大会、すなはち喇嘛の大誓願会が六月二十五日から一ヶ月間盛大裡にとりおこなはれた。私はこの法会を機に年来の宿願がかなつて五台山に巡礼することができたのは何よりの幸であつた。

さて山では顕通寺に駐在の酒井盛典氏、菊地宣正氏等の御好意によつて名利史蹟を巡礼し、金石碑幢をたづね、西藏文漢文の各種刊本大藏経を一々したしく披見することができたこと等、望外の喜びが数多くあつた。いまその一々を述べる余裕はないが、法会中、七月六日に日本求法僧の慰霊祭が五台山中の古刹顕通寺で行はれ、筆者もこれに詣して勝縁に逢ふことができたのであつた。¹⁾

これは、中国仏教史、特に大藏経研究で知られる小川貫式（以下、貫式と略称）が、昭和十六年（一九四一）、中国山西省の五台山を訪れた時のことを、振り返つて記した一節である。文中に「日本求法僧の慰霊祭」とあるように、日本で最初に五台山を訪れた入唐留学僧、興福寺靈仙に關する論考の、その書き出し部分にあたる。貫式は龍谷大学で中国仏教史を学び、以後、生涯にわたつて同学で教鞭をとつた研究者であるが、昭和十四年（一九三九）三月、仏教史学科の修了後すぐに、興亜留學生として中国に赴いており、この論考は、彼の帰国直後、「入唐僧靈仙三藏と五台山」のタイトルで、『支那仏教史学』という學術雜誌に發表された。ただし、論考の内容自体は、靈仙の事績について詳細に検討を加えたものではなく、五台山で靈仙を中心とした日本僧たちの慰霊祭が行われるにあつて、長安で訳経僧として活躍したのち、五台山に赴いて

客死した、という彼の数奇な運命を略述した形となっている。

さて、上記の文章のなかで貫式は、年来の宿願がかなったすえの五台山巡礼を喜んでいますが、しかし、実のところ、この五台山訪問も含めて、彼の中国留学は、単に仏教史研究者として中国の地に学ぶことを目的としていたものではない。当時、日本と中国とは、盧溝橋事件の勃発を契機に、二年前から日中戦争に突入しており、「興亜」という語がそこに冠せられているように、政府の意向をうけて推進された西本願寺の中国開教策と関わって、龍谷大学の若き研究者たちを中国に派遣したのが、この興亜留学生だったからである。渡中後、南京や北京に滞在したのち、貫式が五台山を訪れたのは、昭和十六年（一九四一）七月であったが、その頃にはすでに五台山のある山西省という地域が、治安戦の名のもと、日本軍による激しい侵攻を受けていたことを考えると、^④五台山で六月大会という誓願会が盛大に行われていた事実や、そうした行事への参会も含めて、嬉々とした様子で五台山について語るその文調には、正直、驚きを禁じえないものがある、といつて過言ではない。

以上のように、小川貫式は西本願寺の興亜留学生として中国に派遣され、特に山西省を中心に仏教史跡の調査研究を行ったが、この貫式の中国での動向に注目することで、日中戦争下、日本人研究者が五台山で行った活動について、具体的に明らかにしていくことが、本稿の目的である。そして、こうした戦時下での五台山研究という問題を取り上げる、その契機となったのが、昨年三月、岐阜県各務原市の西巖寺調査に^⑤

おける「小川貫式資料」の発見である。^⑥先述したとおり、貫式は龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者であるが、彼はこの西巖寺に生まれ、住職をつとめた浄土真宗本願寺派の僧侶でもあり、本稿にいう「小川貫式資料」とは、その貫式の自坊から発見された、彼の自筆原稿を中心にした新出資料群を、^⑦便宜的にそう呼んだものである。^⑧本論でも述べていくように、興亜留学生として中国に渡った貫式は、日本陸軍の特務機関と連携しながら、山西省を中心に仏教史跡の調査研究を行っていたらしく、今回の新出資料にも約百点ほど、日中戦争下での自筆調査メモや写真、さらには、日本陸軍が作成配布したと考えられる印刷物が含まれている。この日中戦争時、日本人による中国研究が目覚ましい進展を遂げたことは、現代の研究者間でも自明の事実ではあるにせよ、こうした資料類を直接目の前にすると、改めてそのことを歴史的に検証しておく必要があるのではないかと考えるに至ったのである。^⑨

周知のように、平安時代以降、靈仙、円仁、円覚、惠尊、惠雲、宗叡、奄然、寂昭、成尋など、名だたる僧侶たちがこの地を巡礼し、仏教文化を将来してきた五台山は、中国の数ある仏教霊山のなかでも、日本人にとって特別な地であるといつてよい。それゆえ、日中戦争勃発以後、貫式のみならず、仏教史関係の日本人研究者たちがここに次々と入山した。著名なところでは、外務省文化事業部の留学生として中国に派遣された日比野丈夫、小野勝年の両氏が知られるが、^⑩その他にも、高原一道、酒井真典、三上諦聴ら、日本の仏教各宗派から派遣された諸氏た

ちが入山し、伽藍復興や調査活動を行っていたとみられる。そして、彼らのなかには、紀行文を残した者もあり、その内容を見ると、貫式と同様、研究者たちの多くが、戦争の真新しい痕跡を眺めつつも、この靈山に入山する機会を与えられたことを僥倖と感じていた様子がわかる。むしろ、そうした感覚は、その当時としては特別なものではなかったかもしれないが、戦後、中国との国交回復の難しさを知る立場からすると、日本の歴史学の学問としての発展が、こうした時期を経て齎されていたことに、やはり注意を向けざるをえないのである。

客観性と実証性に基づいて行うことが第一義とされる近代学問であっても、時代というものからは決して自律的にはなりえないのではないか。日中間で戦争が繰り広げられていたこの時期、山西省だけをみても、歴史学以外に、地質学、動物学、植物学、考古学、美術史学など、実に多岐な分野にわたって、日本人による調査研究が進められていたことが諸書によってわかる。そして、それらの活動のほとんどが軍の支援を受けて行われていたことを考えると、学術調査の名目のもと、日本陸軍は戦略の一環として、中国のあらゆる情報を収集することに余念がなかったもの、とみてよい。それだけではない。日中戦争勃発の翌年、時の内閣が出した「東亜新秩序」声明に象徴されるように、この当時、日本では、中国侵略の正当性を謳うため、日本を中心とした新しい東アジア世界の建設を大々的に掲げており、そのことは結果的に、中国を対象とした各分野の学問を進展させる追い風となった。もちろん、仏教史や

日中交渉史の分野でも、この追い風に乗って、実に多くの成果が挙げられていったのであり、興亜留学生であった貫式もまた、そうした趨勢のなかに身を置いた人物であった。そこで、本稿では、その彼が残した新出の「小川貫式資料」に基づいて、山西省での中国仏教史に関する学術調査の一端を明らかにすることで、戦争という特異な状況下、学問が発展をみせていった、そのことの歴史的意義について考察する手がかりを探ってみたい、と考えている。

一 西巖寺蔵「小川貫式資料」から見た五台山

興亜留学生として中国に派遣された貫式は、五台山ではどのような活動をしたのであろうか。本章では、「小川貫式資料」の内容を確認しながら、まずはこの点について紹介することから始めていくことにしたい。

現在、西巖寺に蔵されている「小川貫式資料」のうち、五台山関係のものは大きく二種類に大別される。ひとつは、貫式自筆の調査メモ類で（挿図1）、そのほとんどが原稿用紙に書かれており、一部、陸軍の野線紙や北京美術学校の便箋を利用したものがある。同朋大学仏教文化研究所では、今年度より「小川貫式資料」の整理作業に着手したが、予想外に資料数が多く、自筆メモ類について記載内容にまで踏み込んで、その詳細を検討することは未だできてはいない。しかしながら、資料群を概

観するに、成文的なものは少ないことから、これらは主に山内の諸寺院を探訪した際の覚書か、『清涼山志』など、貫弑が参考にした史書類の抜粋とみられる。以下、彼が各資料の最初のページに書き記した標題にしたがってすべて列記すると、次のようになる。

「五台山六月大会を^マ迎へて 入唐求法の靈仙三蔵を^マ偲ぶ」(※新聞記事の草稿)

「五台山六月大会見学雑記」

「写在『東亜仏教大会』之前」

「五台山金石目録」

「五台山金石碑目」

「五台山金石刻文備忘録」(※表紙のみ)

「五台山と大蔵経」

「五台山頭通寺漢訳大蔵経 北蔵」

「明北蔵攷」

「殊像寺碧山寺北蔵五台山蔵経」

「南蔵」

「羅睺寺南蔵」

「大明統諸経未入蔵者添進蔵函序」

「(五台山調査メモ)」(※標題なし)

「五台山資料 考証・校勘録」

「五台山文殊画像」

「清涼^マ五台山叢書」(※草稿)

「清涼五台山叢書出版計画」(※藁半紙に印刷されたプリント)

「二本班作業報告」(※プリント)

残念ながら、五台山での貫弑の行動が把握できる、詳細な日誌類や紀行文はここには含まれていないが、貫弑が金石碑や大蔵経について特に関心を持ち、それを重点的に調査していたことがわかる。なお、これらのなかで異彩を放っているのが、「清涼五台山叢書」と題された自筆の草稿らしきものと、それとおそらくは対応する「清涼五台山叢書出版計画」という一枚のプリントである。¹⁷⁾そして、この二点の資料から推測するに、貫弑には五台山の歴史について五冊組の叢書にまとめる構想があったとみられ、果たして草稿の最初のページには、「第一冊 清涼三伝 二百五十頁／第二冊 清涼山志 重修増補 三百頁／第三冊 清涼山新志 三百頁／第四冊 清涼五台山文献輯彙 二百頁／第五冊 清涼五台山図録 百頁」という構成が記され、次ページには、第五冊目の図録に関して、唐から中華民国時代まで、時代順に各図を紹介するプランが記されているが、この第五冊目の冒頭には、唐時代の壁画よりも前に、日本陸軍参謀本部による「五台山地勢図」が挙げられている点、五台山の地理をまず提示しようという企図ではあるにせよ、時代の空気を感じさせる章立てとなっている。²⁰⁾

さて、「小川貫弑資料」の五台山関係の資料群のもうひとつは、スクラップブックに貼付された約百五十点の資料である(挿図2)。西巖寺

には、貫式自身が作成したと思われる、中国関係のスクラップブックが六冊残されているが、そのうちの一冊は山西省に関する冊子で、五台山についても、当時の新聞記事や写真・絵葉書、陸軍の特別宣伝班や新民会が発行したパンフレット、レジュメ、チラシなどの印刷物のほか、乗車券や弁当の品書きに至るまで、貫式がその行程や山内で手にしたさまざまなものが、台紙八十二枚にわたって丁寧に貼りこまれている。便宜上、本稿では、これを「山西省スクラップブック」と呼ぶことにするが、これを参考にすると、自筆資料からは見えてこなかった、貫式の五台山での活動の様子がある程度補充することができる。そこで、これらスクラップ類をいくつかに分類し、それぞれについて、以下、簡略に言及しておく。

まず、新聞記事の切り抜きが挙げられる。文字通りのスクラップで、あくまで日本側の立場からの報道ではあるが、貫式の入山時の五台山をめぐる政治的な状況や、貫式が五台山で行った調査の成果などを知ることができる。たとえば、『陣中新聞』の「五台山物語」と題された連載記事には、「蟠踞する共匪討ち 皇軍入山に沸く歓呼」とか、「一ヶ月続く大法会 東亜に和平の息吹き」といった見出しが大きく躍っていて、その記事内容から、八路军と通称された中国共産軍が五台山を占拠し、そのために六月大会が中断してしまったこと、日本陸軍はこれを駆逐して山内を鎮静化し、昭和十五年（一九四〇）には復興第一回目の六月大会を華々しく行ったことなど、五台山で復興六月大会が開催される

に至った経緯が把握できる。さらに、『朝日新聞』北支版の昭和十六年（一九四一）九月二十七日号には、「仏教史上の大発見 五台山にかくれたる経文など 日華提携に貴重な資料」という見出しで、太原の上村特派員が、貫式の山西省での活動成果を具体的に報じている。興味深い記述が含まれているので、その一部を引用しておく、

山西省にあつて支那仏教史を専攻する一留学生により世にも稀な経文、西夏文字その他得難い文献の数々が発見され、わが仏教、史学両界の間に貴重な記録として保存され、さらに各方面より深い研究がすゝめられるべく多大の期待がかけられてゐる、発見された支那古代の文献といふのは

金刻大方広仏華嚴經合論二帖刊記、西夏文藏經扉画断片、元管主

八五台山施經秘密大乘經一帖刊記、日本国僧慶政補刻大方広仏華嚴

經第二、拱二

など計十一種、西本願寺留学生であり龍谷大学支那仏教史専攻の小川貫式氏はさきに山西省特務機関の依頼をうけ支那隨一の聖境五台山の碑文研究のため来原したが、ひきつゞき同山頭通寺住職、山西省特務機関嘱託菊池宣正師の援助をうけ太原市崇善寺に元版大蔵經を調査研究中にもかかわらず右の貴重な文献を発見し得たのである。（中略） 今回の発見により仏教文化史上に日華提携の貴重な資料を齎したものとして各方面より歓喜をもつてむかへられてをり

小川氏の帰国後学界ならびに仏教界に発表される予定である、なほ十一種の文献はちかく太原博物館に保存されることとなつた²²⁾

(※スクラップブックに貼付された新聞記事に、インク書で貫式が直接修正)

とあつて、貫式の五台山調査は山西省の特務機関の要請によるものであつたことが明記されている。ちなみに、貫式の発見した資料は、太原博物館に保存されることになつたとあり、これらは日本に持ち帰られることなく、山西省の地にある博物館に収蔵されたい²³⁾。特務機関については、次章で改めて触れていくが、この陸軍の特務機関の支援のもと、貫式はいくつかの発見をもつて、その調査に一定の成功を収めていたことがわかる。

次に、「山西省スクラップ」で注目されるのは、日本陸軍の特別宣伝班や新民会が制作し、配布したとみられる各種の印刷物である。五台山の六月大会に関するポスターやチラシ、パンフレットのほか、式次第や資料レジュメ、散華やピラのようなものも含まれている。どれも当時の五台山で行われた行事のひとつひとつと直接関係を持つもので、非常に興味深い²⁴⁾が、そのなかでも一点、特に目を引くのは、「五台山六月大会参拝方法」という、新民会内に創設された五台山六月大会事務局が発行した折り畳み式のパンフレットである(挿図3)。新民会は正式名称を中華民国新民会といい、日中戦争開始後に日本軍が樹立した中華民国臨時政府を擁護するため、同じく日本軍によって北京に創設された、中国の民衆教化団体である²⁵⁾。そして、このパンフレットには、五台山の案内

図、五台山への時刻表、参拝に関する案内事項、六月大会の行事日程表などが一枚の紙に盛り込まれていて、大変に便利なつくりになっているが、その非常なる便利さも含めて、六月一日(陰曆)からの大会に向けて、中国本土から多くの人を集めようとする意図が汲み取れる点に、大きな特徴があるといつてよい。たとえば、「一、汽車割引」、「二、参拝路順」、「三、引導及住宿」、「四、貨幣交換所」、「五、其他」と、五項目にわたつて参拝者への手引きを掲載する、その一番最初に今回の参詣者に限つて汽車賃を割引すると謳われていることは、五台山へと人々を誘引する施策のひとつであつたことをうかがわせるが、ただしこの期間、五台山に参詣するには、各県の新民会総会長名で発行した「五台山六月大会参詣証明書」が必要であつたらしく、その証明書の具体的なフォーマットもここには併せて示されている²⁶⁾。さらに、このパンフレットには「本年五台山六月大会之特異性²⁷⁾」と題された解説があり、日本から大蔵経を奉迎する慶讃大法会が行われることをもつて、今回の六月大会はプレミアなものであるという宣伝を、そこに籠めた内容となっている。

次に、「山西省スクラップブック」には、五台山関係の写真が計七十九点、貼付されている。細かいことになるが、写真の大きさには大小があつて、一番小さい約4cm四方の正方形のものは貫式個人で撮影したもの²⁸⁾、それに対して、やや大判のものは写真の解像度も高く、軍などの機関が撮影したものと推測される。主に五台山内の様子を写したもので、東亜仏教大会や日本人求法僧慰霊祭と推測されるいくつかの写真も含ま

れている。そして、それらの行事も含めて、写真全般には日本の軍服を着した軍人がたくさん写っており、当時の五台山の雰囲気をよく伝えている。

さらに、上記以外に、「山西省スクラップブック」に貼付された資料には、貫弍個人の動向がわかるものはいくつかあり、なかでも華北交通の自動車券が興味をひく。「崞県―陽明堡―代県―繁峙―沙河鎮―茶房子―望海峯―台懷鎮」というように、五台山の中心である台懷鎮までの経路がスタンプとして捺されていて、貫弍が入山した当時、北京からの列車終点にあたる崞県駅から先、五台山へは華北交通によってバスルートが整備されていたことがわかる。この華北交通というのは、昭和十四年（一九三九）、日本の国策と連携して、南滿洲鉄道、いわゆる満鉄の流れを汲んで設立され、鉄道・バス・水上交通など、華北地方の交通の開発と運営を行い、旅客や資源の輸送を担っていた特殊会社である。なお、「小川貫弍資料」中には、『五台聖境』という新民会発行の五台山ガイドともいべき小冊子があるが、そのなかの挿図「五台山参拝途徑」に貫弍自身による書き込みがあり、ここから類推するに、貫弍は昭和十六年（一九四一）六月二十七日に北京を發つて、太原西本願寺に逗留したあと、七月三日に五台山入口にあたる代県に到着、翌日には中心街である台懷鎮に到着したとみられる。これに対して、貫弍に先立つこと二年、同じく龍谷大学の興亜留学生として中国に派遣され、昭和十五年（一九四〇）、第一回目の六月大会に参詣した三上諦聴の紀行文には、

北京を出發したのが七月十三日午後八時五十分太原直行の汽車、
（中略）
十六日、早朝司令部に西谷教授と挨拶旁々特別宣伝班に連絡に行く。六月大会に各地から集つた人々、雨の為に忻州河辺村まで行つては引きかへし一週間もうろくしてゐる人もあり、早くたたねば間に会はず、南廻りでは急にも行けず、北廻りの原平鎮崞県、代県、繁峙經由にて行かんと今夜の午前一時の貨物列車に客車一輛連結するといふ、之に乗ずる事を許されて、（中略）
眠れぬために荷物の棚によぢのぼり、荷物並にゴロ寝して夜明けに着いたは忻県、○○部隊の墓標に敬意を表しつゝ、何時つくともさだかならず（七時）忻口鎮、原平鎮と激戦の戦跡を通り抜けて正午頃に終点崞県に着く、此処から百二十軒のトラック行、八輛のトラック皇軍の宣伝班興亜院（蒙疆連絡部、藤井尊順氏（龍大出）等三名）各新聞社記者、新民会、映画班、劇団（支那）総計七十人余警備の兵に護られて崞県城内の特務機関に厄介になり、司令部に吉澤閣下（足利龍大学長従兄弟）に敬意を表し、五台の現状と仏教工作の御高見を聴き、昼食は持参の要もなく美味しい日本米に喜ぶ。午後三時八輛のトラック皇軍に護られつゝ、沙塵をあげて、右に五台山塊、左に勾注山に挟まれた平原の坦々たる道路を北行、陽明堡をすぎ（此処まで鉄道路盤あり）二時間にして有名な代州の巨城を左に見て、時間の関係上見学も出来ず、お客様の（八路軍）来襲の噂に

おびえつ、停車半時間、漸くたつて東行、繁時まで一時間、田舎の小縣城に着いたのが六時半、睡眠不足と貨物車の後尾に荷物と共にゆられ、後から二輛目前車の黄塵を浴びて又日光の直射に真赤になつてしまつた。³¹⁾

とあつて、彼の乗つた車の前後を陸軍が護送しながらの入山であつた様子が記されている。これは日中戦争下、華北を中心に抗日戦を展開した八路軍の潜伏を警戒してのことであり、その緊張のなかでの五台山入りであつたことがよく伝わってくる。華北交通のバスで入山した貫弍の場合と比べると、五台山をとりまく空気がかなり異なつてゐることは興味深く、新聞報道にもあつたように、貫弍入山時にはすでに抗日軍の動きは沈静化し、五台山全山を日本軍が完全に掌握してゐた状況が推定できるのである。

以上のように、「山西省スクラップ」中の資料からは、貫弍の五台山入山時の五台山をめぐる戦況や陸軍の動向が見えてくる。そこで、次章では、さらに「小川貫弍資料」から二、三、興味深い資料に焦点をあてながら、五台山という中国有数の霊山が当時、どのような場として衆目を集めていたのかについて、特務機関と六月大会に特に注目することで考察を深めていくことにしたい。

二 五台山六月大会と日本陸軍

―日本を中心とした民族統合の新たな聖地として

昭和十二年（一九三七）年七月七日、盧溝橋での日本軍への発砲事件をきっかけに、日本と中国とは全面戦争に突入した。この事件は日華事変（日支事変）と呼ばれ、これ以降、中国の領土を日本軍が次々と占領していくことになつた。そして、その四年後、日本はアメリカに宣戦布告し、戦局は太平洋戦争へと拡大していく。

昭和十三年（一九三八）、第一次近衛文磨内閣は、「東亜新秩序」声明を発表し、中国に対する侵略という日本への国際的批難をかわそうとした。それは、具体的には、日本と提携する新興政權を中国に樹立し、東亜和平を築いていくことで、日本の立場を正当化しようとする内容であつた。そして、そうした政府の方針をうけて、日本では「興亜」という言葉が盛んに使われるようになり、³²⁾それに伴つて日本精神や日本文化を中国に受容させる文化政策が推進され、仏教界でも中国開教に力が入れられていくことになつた。

昭和十四年三月研究科を「南宋仏教史研究」と題し、教団篇と教学篇の二冊にまとめて卒業が出来た。時恰も日本は大陸進出の戦時体制であり本願寺において中国に開教師派遣が盛んとなるにつれ、興亜留學生を募集して中国大陸の仏教事情を調査研究する必要性が認められ、北京へは三上諦聰、新野修基、中支へは私と海野の二人が派遣されること、³³⁾なつた。これは禿氏西光高雄諸教授の推薦によるものであつた。

これは「小川貫弍資料」のうち、昭和五十一年（一九七六）に貫弍自身

が記した「自筆履歴書」に添えられた「仏教史学を志して」という草稿の一部である。貫弑が興亜留学生として中国に派遣されたのは、「東亜新秩序」声明が発表された翌年、昭和十四年（一九三九）のことであったが、禿氏祐祥、西光義遵、高雄義堅といった龍谷大学の教授陣の推薦をうけたこと、かつ、それは西本願寺の中国開教策と連携したものであったことが知られる。興亜留学生については、本特別報告の中川剛「新出の西厳寺蔵「小川貫弑資料」について」を参照いただきたいが、時の内閣が出した「東亜新秩序」声明に浄土真宗本願寺派も呼応し、元・法主の大谷光瑞の意向のもと、西本願寺でも中国開教に力を入れるとともに、興亜留学生を派遣したのである。

さて、前章でも紹介したように、「小川貫弑資料」の資料的価値は、「中支」地域担当の興亜留学生として、貫弑が山西省を中心に調査を行った、当時の具体的な様子が明らかになることにある。そして、この視点に立つとき、最も関心を集めるのは、貫弑のような留学生を陸軍の特務機関が支援していた、という事実である。たとえば、冒頭で引用した『支那仏教史学』掲載の論文にあったように、³⁵五台山で貫弑を案内したのは、顕通寺に駐在していた酒井眞典、菊地宣正の両氏であったが、彼らとともに特務機関の嘱託の機関員であったことは留意しておいてよい。すなわち、「山西省スクラップブック」には、酒井氏の名刺があり、その肩書を見ると、「山西省特務機関嘱託／外務省在支特別研究員／酒井眞典／日本・高野山／中華・五台山」とあり、陸軍特務機関の嘱託の

研究員であったことが明確に知られるし、一方の菊地氏についても、同じく「小川貫弑資料」中の太原崇善寺関係の資料に「機関員」として登場していることから、やはり陸軍特務機関の一員であったことが判明する。³⁶さらに、この兩名は三上の紀行文にも登場していて、

丁度事変直前の昭和十二年五六月の頃、母校龍大より学兄小笠原氏小川氏等の来燕の予定あるを機会に、石家莊太原五台大同と仏跡探訪の旅を試みると計画中であつたが、たま／＼の事変の勃発にすべてはお流れとなり、残念に思つてゐた。今回皇軍の支援の下に、一昨年以來外界の事態に超然と山西の五台山に於て聖地の復興に身命を捧げてゐた高原一道氏、菊地宣正氏、酒井眞典氏等のためまざる努力の結果として、六月大会の開催は華々しい鳴物入りに宣伝された。今更宣伝につられるのであるまいが好機逸すべからずと登山の予定をした、が雑事にはまゝまれて何等の準備もせずに、再遊の下準備にと出て行つた。³⁷

と、紀行文の書き出しにあるほか、七月二十日条には、午後六時より今度五台山に登山した日本僧侶の（各官庁につとめる在籍者をも含む）懇親会が顕通寺に開かれ、五台を中心に求法僧顕彰会等色々話ははずむ、集りしもの左の如し。

塚本洗月（西） 稲葉慶立（眞言） 西谷順誓（西） 吉兼正安（東）
河野弘（臨濟） 藤井弘（東） 禱隣（顕通寺住持） 友岡教善（西）
渡辺憲静（日蓮） 小川仁慈郎（山西特機） 菊地宣正（東） 三上諦

聴（西）然琇（僧会長）池尻糸導（西）高原一道（西）桜井圓信（天台）酒井眞典（真言）松島正見（曹洞）平川博道（浄土）の諸氏。³⁸

とあって、酒井は真言宗の、菊地は浄土真宗大谷派の僧侶であったことや、両氏が日中戦争勃発直後から五台山に入山して、真宗本願寺派の高原氏とともに五台山復興に尽力しており、その結果が復興第一回目の六月大会の開催につながっていたことがわかる。これを要するに、陸軍の特務機関は彼らのような学僧を、その囑託として意図的に採用していたものと思われる。⁴⁰ 当時、特務機関は中国各地域に置かれ、後に興亜院へと名称を変えていくが、この興亜院では歴史文化や宗教習俗などはむろん、中国に関するありとあらゆる種類の情報を収集していたことがわかっていくから、その前身にあたる特務機関でも、歴史や仏教に関する情報を収集していくにあたって、こうした僧籍と専門的知見を持った人物を機関員に採用することで、情報収集の質と効率を上げようとしたもの、と推測できる。果たして、自筆原稿類から金石文と大蔵経の調査を重点的に行っていたことがわかる貫式もまた、特務機関の支援を受けて山西省の調査を行ったのであり、その結果、貴重な発見をしたと新聞に報じられたことは、前章でも紹介した通りである。このように、占領先における情報収集という戦略的視点に立つとき、日中戦争下での軍部と研究者との連携は、むしろ必然であったと理解できるのである。

もうひとつ、「小川貫式資料」を通して見えてくるのは、五台山とい

う中国有数の霊山が、日本を中心とする「東亜新秩序」を体現化して大陸の人々に示す、そのための格好の舞台となっていた、ということである。前章でも、「五台山六月大会参拝方法」という折り畳み式パンフレットを通して、昭和十六年（一九四一）の六月大会が特別なものとして大きく宣伝されたことを紹介したが、五台山で行われていた最大の宗教行事であった六月大会の復興は、そうした軍部による「工作」⁴²を最も象徴していた、と考えられる。ちなみに、日比野丈夫によると、六月大会とは、旧暦の六月六日から十日間行なわれる文殊菩薩を供養する大誓願会のことを指し、文殊菩薩を供養し、あまねく一切の衆生が正覚を得ることを願って、諸厄を祓うとともに、風雨の順調や五穀の豊饒など、諸々の吉祥を得ることを祈る場であったという。もともとはチベット黄教の改革者であった宗喀巴（ツォンカパ）がチベットの拉薩において始めた行事で、第五代達賴喇嘛（ダライラマ）の時に五台山でも始まったが、この第五代と清の太宗や世祖との間には交渉があったことから推して、確実な年代は不明であるにせよ、五台山における六月大会の創始は清時代の順治年間（一六四四～一六六一）以降のことだろう、としている。⁴³

そして、同じく日比野の言及にあるように、この五台山での六月大会は、大会の開催期間中、省内・省外から多くの商人を集めて市が開かれ、牛馬や駱駝などを中心に交易が行われる、重要な機会でもあった。明時代以降、活躍した山西商人の例にみるように、もともと経済の発達

していた山西省にあつて、中国各地はもとより、蒙古やチベットから、民族の壁を超えて人々が参集するこの大会は、単なる宗教行事に終わらない意味を持つていたと考えてよい。にもかかわらず、多くの商人を集めて交易が行われるこの重要な機会が、日華事変後、中断の憂き目を見たのである。本稿では、中国共産軍による五台山侵攻について、その正確な事実関係について論じる立場にはないが、「小川貫次資料」からは、一時中断となつた六月大会を、共産軍を駆逐することで復興させた日本軍が主張し、それを日本でも、中国でも、大々的に宣伝していたことが確実に導きだされるのである。⁽⁴⁶⁾そして、清時代、康熙帝がモンゴルに対する融和策として、五台山のチベット仏教化を図つたという指摘があるように、⁽⁴⁷⁾五台山が地理的にモンゴルと近接する、複数の異民族が混在する場であつたことを考えると、宗教的にも経済的にも要地であつた五台山を掌握し、この霊山の機能を日本仏教的な聖地として再構築していくために、多くの仏教関係の研究者を投入した、と想定できるのである。⁽⁴⁸⁾

それでは、日本軍によつて大々的に宣伝された昭和十六年の六月大会は、実際にどのような構成で行われたのであろうか。先に紹介した「五台山六月大会参拝方法」という折り畳み式パンフレットにも、詳細な行事予定表が掲載されていたが、ここでは同じく「山西省スクラップブック」に貼付され、日本軍特別宣伝班の署名のある「五台山六月大会寺院行事予定表」という、ガリ版刷のレジュメを紹介してみたい。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫次資料」調査報告(一)

五台山六月大会寺院行事予定表

陰曆	陽曆	行事	寺院
六、一	六、二五	日本大蔵経奉迎(普化寺ヨリ菩薩頂へ行列 後贈呈式)	菩薩頂
自六、六 至六、一五	六、三〇 七、九	滕会道場	菩薩頂
自六、一 至六、五	六、二五 六、二九	日本大蔵経入山大法要	碧山寺
六、六	六、三〇	日本大蔵経入山大法要故福田宏一氏慰霊祭	漢蔵仏学院
六、七	七、一	全	蒙蔵仏学院
六、一二	七、六	新民仏教青年大会日本求法僧慰霊祭	顯通寺
六、一三	七、七	和平祈祷支那事変殉難者英霊慰霊祭	顯通寺
		東亜仏教徒大会	顯通寺
六、一四	七、八	菩薩頂跳鬼	菩薩頂
六、一五	七、九	菩薩頂ヨリ行列羅睺寺へ跳鬼	羅睺寺
自六、一六 至六、二五	七、一〇 七、一九	五頂ニテ和平祈祷法要	各頂
自六、一六 至六、二〇	七、一〇 七、一四	日本大蔵経入山大法要	鎮海寺
自六、二一 至六、二五	七、一五 七、一九	全	顯通寺
自六、二六 至六、二九	七、二〇 七、二三	全	塔院寺
未定		通俗講経	十方堂

(※一行空白)

このように、ごく簡略なものであるが、陰曆の六月一日から六月二十九日まで、一ヶ月間をかけて行われたこの年の六月大会がどのようなスケ

ジュールで行われていたか、すべて知ることが出来る。六月大会の開催期間は、日比野の解説では本来は十日間だとみられるから、復興後はその規模を拡大して行うことに変更されたのかもしれない。そして、大会の幕開けとともに、日本から大蔵経を運び入れて入山法要が行われたのであり、それはあたかも日本式仏教の五台山への逆輸入を象徴する、一大デモンストレーションであった、と言つてよい（挿図4）⁽⁴⁹⁾。さらに、これにひきつづき、山内の中心にある顕通寺において、貫式も参加したという日本人留学僧の慰霊祭や、日華事変の殉難者慰霊祭、東亜仏教徒大会⁽⁵⁰⁾といった行事が立て続けに行われているが、「山西省スクラップブック」には、「五台山六月大会東亜仏教徒大会宣言」と題されたプリントがあり、それには日本文、華文、チベット文、モンゴル文でそれぞれ宣言文が記載されているほか、同じく貼付された「東亜仏教徒大会式次」にも、日本仏教徒代表、中国仏教徒代表、西藏仏教徒代表、満州仏教徒代表、蒙古仏教徒代表とあつて、各民族の仏教徒の代表が順に挨拶を述べる構成で進められていたことがわかる。おそらく、五台山は「東亜新秩序」という日本を中心とした新しい東アジア構想を具現化する、そのための格好の舞台となる可能性を秘めていたのだと思われる。仏教というアジアに普遍的な思想に基づき、五台山という古くから複数の民族を集めてきた中国有数の聖地で、六月大会という華やかな宗教行事を復興することで人心をつかむ。五台山という場を、このような形で巧みに利用しようとする意図が、日本軍にはあつたのではないだろうか。果

たして、同スクラップブックには、「昭和十六年七月七日／日支事変戦没将士追悼慰霊祭／於大顕通寺」と貫式がキャプションをつけた大判の写真があつて、戦没者慰霊祭に参加した人々の姿が写つており（挿図5）、衣装からも実際に多民族が集結して慰霊祭が行われていたことが知られるが、その最前列に日本の軍人が陣取る光景は、まさに当時の日本が目指した新東亜世界の縮図として考えることも、あながち誤りではないだろう。⁽⁵¹⁾

おわりに

本稿では、「小川貫式資料」に基づいて、日中戦争下の五台山の動向を概観してきた。すなわち、その長い歴史が培ってきた宗教性を踏まえつつ、五台山という中国有数の霊峰を、日本が掲げた「東亜新秩序」を具体的に実現する場として利用したのであり、こうした企図のもとで、研究者たちが日本陸軍と連携しながら調査を進める、そうした環境が整えられていった、と類推できる。それでは、戦争というものが中国仏教史研究者の調査研究にどのように影響を与えたのだろうか。最後に、この点について、日本求法僧慰霊祭の中心人物とされ、貫式も小論をしたためた、平安時代の留学僧靈仙に注目して、稿を終えたいと思う。

近代以降、靈仙の研究史をたどると、二つの大きな再評価の機会があつたことがわかる。ひとつは、国宝保存会委員をつとめるなど、古美

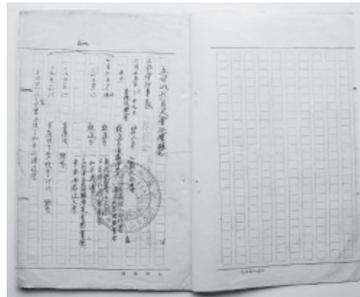
術保存事業への尽力で知られる荻野仲三郎が、大正二年（一九一三）、石山寺の経蔵で『大乘本生心地観経』を発見した時であり、第一巻の奥書に、長安醴泉寺において翻訳に中心的な役割を果たした訳僧としてその名前があり、靈仙は研究者間でグローバルに活躍した日本人留学僧として一躍着目を浴びることになった。そして、もうひとつが、この日中戦争下における五台山でのことである。ところが、最近では、史料上の問題から、本当に靈仙が中国で訳経僧の地位にあったか否かについて、疑問視する見方が有力になってきているという⁵⁵。もちろん、時代が異なれば、史料批判の方法もまた違ってくるのかもしれないが、日中戦争下、新東亜建設に都合のよい人物像が求められた結果、靈仙の事績の検証に偏りの出た可能性も、十分に考えておかなくてはならない。

同様の例は他にも散見される。太平洋戦争下の高丘親王や山田長政である。彼らは日本を離れ、マレー半島やシヤムに足跡を残したとされる歴史的人物であるが、当時の軍部はこうした南進の日本人を再発掘して、英雄視することで、戦意昂揚につなげていた⁵⁶。特に、皇族出身の求法僧であった高丘親王の場合、昭和十七年（一九四二）の日本軍によるシンガポール攻略に関わって、その翌年には国定教科書に登場することになった。身を賭して仏教を求法した、この皇族出身の一僧侶の行動を宣揚することで、青年学徒を奮い立たせようとした軍部の思惑がそこからは透けてみえるが、国定教科書に記された内容も含めて、そのことはこの当時の研究書に親王の事績として疑わしい記述がまま見受けられ

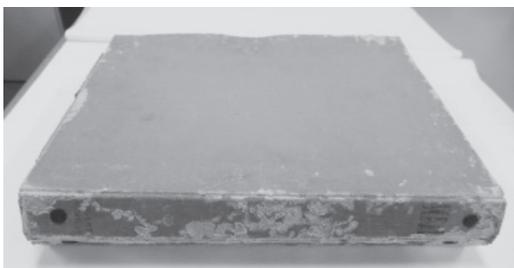
る、という結果をもたらすことになった⁵⁷。では、靈仙の場合はどうだろうか。たとえば、無名に等しかった靈仙の名が人名辞典に採用されたのが、戦争に突入した昭和十三年（一九三八）に出版された『新撰大人名辞典』⁵⁸であったことを渡辺三男氏が指摘しており、程度の差はあるにせよ、高丘親王や靈仙といった東アジアで活躍した歴史的人物が再発掘されていくのが、日中戦争から太平洋戦争にかけての時期に顕著であったことは、決して見落とされてはならない。中国はむろん、アジア各地を占領していくにあたり、婉曲的にはあるが、占領理由の一つとして、日本人ゆかりの地であることが求められるようになり、時にそれが大きく歴史人物や歴史史料の解釈を歪めることもあるのである。

貫式の五台山での滞在期間は二十日間であったが、貫式の自筆調査資料類からは、そのわずかな間に、大蔵経の伝来状況の確認や金石文の採録など、精力的に調査を進めていた様子がうかがえる。貫式が真摯な態度で調査に臨んだことはいうまでもないが、靈仙の慰霊祭に参加できたことを、胸を熱くして語るその様子からすれば、彼もまた、時代に規定された研究者であった、とみることができるのである⁵⁹。

挿図1 西巖寺蔵「五台山六月大会雜記」



挿図2 西巖寺蔵「山西省スクラップブック」



挿図3 西巖寺蔵「五台山六月大会参拝方法」
表



裏



挿図4 西巖寺蔵「五台山写真」

大正新修大蔵經奉迎行列



挿図5 西巖寺蔵「五台山写真」

日支事変戦没将士追悼慰靈祭



註

- (1) 小川貫式「入唐僧靈仙三藏と五台山」(『支那仏教史学』第五卷第三、四号、昭和十七年)。
- (2) この靈仙は、八世紀、奈良の興福寺に止住して、法相教学を学んでいた僧侶である。法相宗を代表して遣唐学問僧に選ばれ、延暦二十二年(八〇三)、最澄や空海らと共に入唐し、最澄がわずか一年、空海でも二年で帰国したのに対して、この靈仙は二十年以上も唐に留まって、日本人ながら、当時の中国最先端の訳経場で翻訳事業に携わっていた、と推定されている。元和五年(八一〇)七月、長安の醴泉寺では、『大乘本生心地観経』の翻訳が始まったが、翌年には憲宗皇帝に献上されることになるこの訳経の場で、靈仙は訳語と筆受という重要な役を兼職していたという。後に、靈仙は長安を離れ、五台山に移り、そこで客死しているが、彼が中国宮廷の内道場に内供奉僧として奉仕していたことは、五台山での靈仙の跡を慕って、円仁が『入唐求法巡礼行記』に「日本国内供奉翻経大徳靈仙」と書き付けていることからわかる。しかし、最近では、こうした靈仙の事績について見直しも検討されている。
- (3) 文末の「小川貫式略年表」を参照のこと。
- (4) 笠原十九司『日本軍の治安戦―日中戦争の実相』(岩波書店、平成二十二年)。
- (5) 岐阜県各務原市持田に所在する浄土真宗本願寺派の寺院である。
- (6) 同朋大学仏教文化研究所では、二〇一六年度、計五回にわたって西厳寺調査を行った。その内訳は次の通りである。第一回調査・二〇一六年三月三日。第二回調査・二〇一六年六月二十六日。第三回調査・二〇一六年七月十五日。第四回調査・二〇一六年九月二十二日。第五回調査・二〇一六年九月二十六日。なお、西厳寺の現住職であり、貫式の長男でもある小川徳水氏によって、「小川貫式資料」の大半は個別に紙袋に入れられてはいたが、徳水氏自身、場合によってはこれを廃棄する、という考えをお持ちであったため、今回、これらを

当研究所の発見した新出資料とさせていただき、悉皆調査に着手した。ところが、貫式の自筆原稿類が一転して調査対象となったことで、紙袋に入れられていたもの他にも、次々と資料として扱うべきと思われるものが出現し、現在もまだなかなか全貌が見えていない状態にある。今後ひきつづき調査を続け、将来的には目録を作成し、画像データベース化して、紀要やデジタルアーカイブス上で公開していく予定である。

(7) スクラップブック類に貼られた写真や絵葉書などを一点の資料としてカウントするかどうか、今後のデータベース構築の過程で方針を決めていく予定であるため、現段階では資料数について明確に提示できない。ただし、写真の内容はかなり貴重であると予測されることから、現段階ではこれらを含めて約千点としておきたい。

(8) 西厳寺には「小川貫式資料」のほか、大谷探検隊関係の「橘瑞超資料(敦煌文書)」や、貫式自身が日本で蒐集した大蔵経の断簡類があり、これらについては今までも研究者の間で注目されてきた。特に、大蔵経類の断簡は、京都大学人文科学研究所の梶浦晋氏によって、写真撮影され、コレクションの大きな把握がすでになされている。また、貫式が中国留学時に入手した各種拓本類のうち、龍門石窟に関するものについては、龍谷大学アジア仏教文化研究所の佐藤智水氏によって、京都大学人文科学研究所、東京文化財研究所に蔵されている同種拓本との比較分析調査が進められている。

(9) たとえば、『支那仏教史学』は当時の学界の動向について、「支那仏教の総合概括的の業績の出現」、「日本仏教の源流としての、東亜文化圏内の存在としての、支那仏教の生成発展を考へ、それが日本仏教に如何に関連をもつたかという点に着目して、日支仏教の交渉の問題を考究したものが多かつた」と述べている。「昭和十五年の支那仏教史学界点描」(『支那仏教史学』第五卷第二号、昭和十六年)。

(10) 彼らは外務省文化事業部の研究員として中国留学の機会を与えられたほか、さらに東方文化研究所も支援を受けていた研究者たちである(日比野丈夫・小野勝年『五台山』東洋文庫593、座右宝刊行会、昭和十七年。なお、本稿では、平成七年に平凡社から発行された新

版を使用した。小野勝年・日比野丈夫「五台山の現在と過去」(『日華仏教研究会年報』第五号、法蔵館、昭和十七年)。なお、貫式にはこの「五台山」の書評を記したものがあつた(『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十八年)。

(11) 浄土真宗本願寺派からは、塚本洗月、西谷順誓、三上諦聴、池尻糸導、高原一、大谷派からは吉兼正安、藤井弘、菊地宣正、真言宗からは、酒井眞典のほか、稲葉慶立、臨濟宗からは河野弘、天台宗からは櫻井圓信、曹洞宗からは松島正見、浄土宗からは平川博道らの各氏が入山したことが、三上紀行文の内容からわかる(三上諦聴「五台山紀行」『支那仏教史学』第四卷第三号、昭和十五年)。

(12) 注10日比野・小野前掲書。注11三上前掲文。注11三上前掲文。なかには、小野勝年や和島誠一のように、軍部との関係を冷静に観察する研究者もいる。すなわち、小野は紀行文の末尾で、「今日我々が五台山を訪れても、全く古い遺物や遺蹟に接することが出来ない。(中略)しかし注意しなければならぬのは、たとひ物はなくてもそこに流れてゐる伝統の力である。五台山は未だ生きてゐると思ふ。今では蒙古人の勢力は衰微して、彼等にその復興は期待出来ないとしても、いつかは又この千数百年の伝統が新たな息吹をふき返すときが来るであらう。それは、新たに勃興する蒙古人によつてか、また普濟仏教会の如き漢人の教団によつてか。何れは未来が解決するであらう。現在たゞ一つ対五台山政策の上に於いて考へるべきことは、五台山がその最も熱烈なる信者を有してゐるところの蒙疆にはなくて、北支那にあるといふ矛盾なのである」と皮肉を述べているし(注10小野・日比野前掲論文、考古学者の和島誠一もまた、「一番大きな教訓は、山西省で人民に背を向けられてゐる調査が、いかに困難でみじめなものであるかを痛感させられたことです。侵略者の銃剣に守られる立場に身をおいたことは致命的でした」と、山西省での調査を冷静に振り返つてゐる(和島誠一「国民に背を向けた発掘と国民とともにする発掘」『歴史評論』第九十六号、昭和三十三年。後に『日本考古学の發達と科学的精神』所収、和島誠一著作集刊行会、昭和四十八年)。

(14) 宮本敏行「山西學術紀行」(新紀元社、昭和十七年)。宮本は朝日新聞社の従軍記者であつた。注13和島前掲書。水野清一・長広敏雄「雲崗石窟—西曆五世紀における中国北部仏教窟院の考古学的調査報告—東方文化研究所調査、昭和十五年—二十年」京都大學人文科学研究所報告(京都大學人文科学研究所雲岡刊行会、昭和二十七年—五十年)。近衛文麿内閣。

(15) 挿図1で示した「五台山六月大会見学雜記」には、旅程や見学先の予定が簡略に記されてゐるが、貫式の実際の五台山における足跡をここからはたどることはできない。また、「五台山金石刻文備忘録」と題された自筆原稿があり、あるいはここには五台山での調査経緯が記されていたかとも推測されるが、残念ながら現状では表紙一枚のみしか残されていない。今後の調査での発見に期待したい。ともに日付は示されていないが、草稿についてみると、使われていた原稿用紙が、昭和十六年の日付を持つ、他の五台山での自筆調査メモと共通することから、おそらく五台山調査の前後に中国にて執筆したものだとも推測できる。

(17) 三上諦聴もまた、「今回は治安の関係上単独に走り廻れず、何れも広大なる地域に点綴した結果、個人の調査が余りにも小さく、聖地五台山研究には団体的なる総合的研究の必要を痛感、今更乍ら大陸の大陸的なる感を深くしたものである」と、五台山について総合的な研究の必要性を提言している(注11三上前掲文)。

(18) 「五台山図録」五台山地勢図 日本陸軍參謀本部「台懷鎮」——唐代五台山壁画 甘肃燉煌石窟第一百十七壁画三枚 ペリ才燉煌図録所収 / 宋・元・明五台山図繪 未調査 / 清 康熙五台山景境山圖 康熙三十六年周三進修纂五台山志所収 / 雍正五台山圖 欽定古今圖書集成山川典卷三十一所収 / 乾隆五台山圖 乾隆四十年王秉韜纂修五台山志所収 / 光緒五台山圖 光緒九年孫汝明修五台山志所収 / 中華民國五台山写真集成。

(19) まだ調査段階ではあるが、この小川貫式による『清涼山五台山叢書』は、おそらく刊行されなかつたとみられる。

(20) 『陣中新聞』七〇九〜七二三号(昭和十六年)。

(22) 『朝日新聞』北支版・昭和十六年九月二十七日号。本稿への引用は「山西省スクラップブック」に貼付された記事切り抜きによる。本論では中略したが、引用した記事には、貫式発見の資料について、以下のように詳細に説明を続けている。

ことに西夏文蔵経扉画中に書き綴られた三行の西夏文字二十九字は今を去る五「七・貫式修正」百余年前西夏国盛んなりしころ、同国王李元昊と野利仁榮なるものの創案といはれ、元の大徳年間、松江府僧録管主八が王旨をうけ中支杭州路大万寿寺において影印せる龐大三千六百二十余巻の経本の扉画で護「讀・貫式修正」法図の一部分と天牌の一頁とが塵埃山積の同寺反古中より発見されたもの、西夏文字二十一「九・貫式修正」文字は西夏学究明の貴重資料として垂涎措く能はざるものである。

また日本国僧慶政補刻大方広仏華嚴経巻第二、拱二は約七百二十年前南宋の寧宋、嘉定年間（わが鎌倉時代）の作といはれ福州開元寺版大蔵経の一冊でその第十三頁「紙・貫式修正」末尾に「日本国僧慶政捨」の七文字が施版刊記されてゐる、これによれば慶政は当時わが国より渡支し福州に大蔵経を求めて托鉢したがその板木の毀損せるもの多く、ために自ら旅費の一部を割き版をつくり、その修理補刻をなしたのであつた。

わが宮内省図書寮の旧西山法華山寺蔵福州版大蔵経の華嚴経巻二「二・貫式修正」十二、涅槃経巻三十二には日本国僧慶政の喜捨版なることが記されてゐるが、いまだこの経中に日本国僧の名が明記されてゐるや否やを知るに由なく仏教界に多大の疑問と期待を抱かれてゐたものであつた。

(23) 「山西省スクラップブック」には「太原博物館案内」という小冊子も貼付されている。ただし、この案内は貫式発見の諸資料が収蔵される前に作成されたものらしく、新聞で報道された経典類についての掲載はない。また、現在、これらの資料がどうなっているかについては未確認である。

(24) 編集者のところに「五台山六月大会事務局編（新民会山西省総会内）」とある。

(25) 新民会設立時の「章程」には、創設の目的として「日滿支の共榮を顕現し、剿共滅党の徹底を期す」とあつて、日本軍に協力し、抗日の共産党と蒋介石の国民政府を滅亡させることが謳われている（石島紀之「新民会」、「アジア・太平洋戦争辞典」、吉川弘文館、平成二十七年。王強「日中戦争期における新民会の厚生活動をめぐって」、「現代社会文化研究」第二十五号、平成十四年）。

(26) 「山西省スクラップブック」に貼付された、山西省五台山六月大会後援会発行のチラシ「五台山六月大会告民衆書」にも同様に、参拝要項として、六月二十五日から七月九日にかぎり、「火車」の代金、すなわち汽車賃を減価すること、それには各地の新民会発給の参拝証明書が必要なが明記されている。

(27) 「本年五台山六月大会之特異性」の全文は以下の通りである。

六月大会之中心為菩薩頂之勝会即所謂誓願会自不待言
但本年之六月大会有与往年鮮見之特異性是即於五台山各寺院及仏学院奉行大蔵経入山之慶讚大法会

此次入山之大蔵経為高楠順次郎博士監修之大正新修大蔵経家日本大阪市「贈大蔵経奉讚会」贈送者正編五十五巻為現在難得之宝典其發起者為故福田宏一居士以一、日本仏教文化之海外宣揚 二、与海外仏教徒之親善 三、对印度中国日本仏教会之報恩主旨發起寄贈此大蔵経於諸名利之誓願由大正十五年頃親雲遊勤道於日本内地滿州蒙古中国等地尚不願以此事誓帰功於一身發起贈大蔵経奉讚会方奔走中於昭和十一年十一月仙逝大阪「改行マ」

奉讚会経福田寿美子未亡人中井玄道師丸山義淵師及其他人之尽力得繼承福田氏之遺志於昭和十二年五月贈滿州国新京般若寺一部昭和十六年二月末北京仏教同願会中国仏教学院山東省青島湛山寺仏学院各一部献経既已到達而寄贈与五台山漢蔵仏学院者於昭和十六年四月十六日到達山西省太原予定於六月二十五日送置五台山菩薩頂此次本故福田宏一氏之誓願蒙贈大蔵経奉讚会贈送宝典对此尊貴之献経為酬謝盛意於五台山六月大会中在各寺院奉行大蔵経入山慶讚大法会

(28) 西厳寺現住職の小川徳水氏の言による。

- (29) 京都大学地域研究統合情報センター「華北交通アーカイブ」(<http://codi.rois.ac.jp/north-china-railway/>)
- (30) 『五台聖境』(中華民國新民会、発行年不詳)。(一)写真、(二)事変後の五台山、(三)五台山的沿革、(四)新民会的使命」といった章立てとなっていて、写真には「五台三六月大会盛況」「五台山六月大会実況」「新民会工作の一部」とキャプションが付されている。注11三上前掲文。
- (31) 浄土真宗本願寺派の執行であった梅原真隆は、興亜について、大東亜建設のために物心両面で国家に「奉公」することだと述べている(梅原真隆「興亜精神と仏教」、『教海一瀾』一九三九年八月二五日号、昭和十四年)。
- (32) 講演のための下書きではないか、と類推される。
- (33) 昭和十四年(一九三九)、西本願寺法主の大谷光瑞が「興亜奉公の消息」を出し、興亜促進運動を推進している。
- (34) 注1小川前掲論文。
- (35) 「崇善寺蔵経調査備忘録」「太原崇善寺所蔵宋元版大蔵経存欠調査日記抄」など。詳しくは、本報告の史料紹介を参照のこと。
- (36) 注11三上前掲文。
- (37) 注11三上前掲文。
- (38) 注11三上前掲文。
- (39) 三上は酒井について「外務省特別研究員にて旁特務機関の嘱托^[マ]として活躍中の西蔵仏教の専門家」と記述している(注11三上前掲文)。
- (40) 野世英水氏のご教示によると、南京の憲兵隊でも僧侶を軍の職員として採用して、効率を図った例があるという。
- (41) 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編「興亜院と戦時中国調査 付刊行物所在目録」(岩波書店、平成十四年)。
- (42) 三上の紀行文に記されていた、崑崙城内の特務機関司令部で五台山の現状と「仏教工作」の高見を聞いたという記述が想起される(注11三上前掲文)。
- (43) 注10日比野・小野前掲書。他にも、この大会中、最も人気を博した跳鬼という出し物について言及している。
- (44) 注10日比野・小野前掲書。「蒙古、西蔵は勿論、満州や華北各地から

- も牛、羊、馬、驢、騾等の家畜を率いて入山し、これが買付けを目的に漢人が多数にやって来るので、かつてはその売買は繁盛を極めた。もとよりその時には漢人の市も立って、西蔵人や蒙古人は家畜を売って、その代りに茶を初め日用雑貨や食料品などを買って行ったであろう。その交易場は、いつも台懷鎮の東、清水河の河原と定められていた。これに対して課せられた税金の額だけでも莫大なものと称せられるから、その交易の総額はまた推して知るべきものがある」と言及している。
- (45) 近代銀行の発祥地は山西省の平城である。道光四年(一八二四)に平遥で創業した日昇昌は、現在、中国票号博物館として公開されているが、清国で初めての個人金融機関で、これが近代銀行の前身であるとされている。
- (46) 「山西省スクラップブック」には、「忠告八路軍士兵書」あるいは「告晋綏軍将士」とした、五台山六月大会を宣伝したビラのようなものも貼付されている。そこには「趁着五台山六月大法会 抛去槍桿懺悔礼仏」とあり、十五cm×十cmといった小さなサイズであることや、文殊菩薩の大誓願会を機会として降伏を呼びかける内容になっていることから、山間部に撒かれたビラではなかったかと想像される。
- (47) 新藤篤史「17世紀末、清朝の対モンゴル政策―康熙帝の五台山改革を中心に―」(『大正大学大学院研究所』第三十八号、平成二十六年)。これは新民会が中国各地で行った文化政策と同様の効果を狙ったものと推定できる。川島真「華北における「文化」政策と日本の位相」(『東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班(平野建一郎)編「日中戦争期の中国における社会・文化変容」(東洋文庫、平成十九年)』。この論文は、新民会を中心に、日本の占領地における文化政策について検討したもので、戦時体制下の日本は共榮圏の建設のため、日本本質であることをしきりに宣伝したことが紹介されているが、日本精神を受容させることで、それを身につけた者を対日協力者として体制に組み込むことが企図されたことが指摘されている。
- (49) 奉迎の行列写真は「山西省スクラップブック」にも貼付されていて、貫式のキャプションには「菩薩頂、中台ヲ望ム 大正新修大蔵経／

奉迎行列」とある。

(50) 昭和十四年(一九三九)二月、上海で中支宗教大同連盟が結成された。形式的に、総裁として近衛文麿、副総裁に大谷光瑞を推戴する組織で、神道部、仏教部、基督教部、総務局を置いていたという。仏教部の部長には福田闡正が選出され、この仏教部が計画をした大きな事業が東亜仏教大会であったという。(松谷暉介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策―中支宗教大同連盟をめぐる諸問題―」、『社会システム研究』第二十六号、平成二十五年)。

(51) 日本文の内容は以下の通りで、これを漢・西蔵・満州・蒙古という各民族の母国語にそれぞれ翻訳して配布されたとみられる。

一、我等ハ東亜仏教徒タルノ大自覚ニ基キ四海同胞ノ仏教精神ヲ体シ「破邪顕正」ニ邁進ス

一、我等東亜仏教徒ハ万古不滅ノ妙道ニ依リ弥々盟契ヲ固クシ世界平和ノ確立ニ貢献ス

一、我等東亜仏教徒ハ興亜ノ為殉難セル幾多ノ靈ニ感謝シ聖地五台山ニ「東亜之礎石」(忠霊塔)を建設ス

(52)

式次第の内容が以下のようなものである。

東亜仏教徒大会式次

地址 於顕通寺大雄宝殿前

日時 陽七月七日 陰六月十三日 下午一時

一、全体蕭立

二、奏楽 (1) 青廟 (2) 黄廟

三、向中日両国旗暨釈迦牟尼仏敬三鞠躬礼

四、日本仏教徒代表挨拶……………未定

五、中国仏教徒代表挨拶……………□福

六、西蔵仏教徒代表挨拶……………阿□□□

七、満州仏教徒代表挨拶……………□増□□

八、蒙古仏教徒代表挨拶……………丹僧仏

九、来賓祝詞

十、決議之朗読

十一、誦三帰依文(一) 奏楽 (A) 青廟 (B) 黄廟

十二、閉会

(53) ちなみに、最前列、壇上の中央の人物はその相貌から多田駿ではないかと推定できる。その他にも、『多田大将／菩薩頂参詣』「多田大将／華語訓話」と貫式がキャプションを付けた一枚もある。多田は、日中戦争の非拡大派で、日中戦争が勃発する以前、日中間で戦争をすることが両国民にとつていかに不幸なことであるかを唱え、涙ながらに日中和平を主張した人物である。その後も、日中和平の道を模索し続け、東条英機と対立したことで名将として知られるようになったが、『岩井秀一郎』『多田駿伝―日中和平』を模索し続けた陸軍大将の無念―、小学館、平成二十九年)、もし本当にこの写真に写っているのが多田駿だとすれば、陸軍屈指の中国通が、この時期、六月大会のために五台山入りして各行事に参加していたことになり、大変に興味深い。

(54)

これ以降、多くの先学によつて、靈仙に関する研究が発表されていくことになるが、たとえば、大正四年(一九一五)、今津洪獄氏が『一乗要決』巻下によつて靈仙が興福寺僧であることを示し(今津洪獄『日本国翻経沙門靈仙筆受心地観経に就て』(『仏書研究』第七号、大正四年)、大屋徳城氏が『法相燈明記』という新出史料によつて延暦二十二年(八〇四)に靈仙が入唐したと推定するなど(大屋徳城『日本国訳経沙門靈仙三蔵に関する新史料』(『無尽灯』第二〇巻第一号、大正四年)、後に加筆して『大屋徳城著作選集・第二巻 日本仏教史の研究一』に所収、国書刊行会、昭和六十二年)、靈仙に関する史料が提示され、それに基づいて新知見が加えられていくことになる。

(55)

靈仙については別稿で改めて論じることにした。

(56)

矢野暢『日本の南洋史観』(中公新書、昭和五十四年)。

(57)

佐伯有清「虚実」に揺れる高丘親王」(『高丘親王入唐記 廢太子と虎害伝説の真相』、吉川弘文館、平成十四年)。

(58)

『新撰大人名辞典』第六卷(平凡社、昭和十三年)。後に『日本人名大事典』と題して復刻されている。

(59)

渡辺三男「靈仙三蔵―嵯峨天皇御伝のうち―」(『駒沢國文』第二十

四号、昭和六十二年)。渡辺氏によると、明治十九年(一八八六)の日本最初の人名辞典である『大日本人名辞書』(嵯峨正作編『第日本人名辞書』(経済雑誌社、明治十九年)以来、靈仙の名はこの種の辞典類には採録されてこなかったという。

貫式が調査を行った昭和十六年(一九四一)当時、治安戦の名のもと、すでに山西省全域が日本軍による大量殺戮や収奪行為の脅威にさらされていたことを思うと、戦況をほとんど感じさせない貫式の記録には、むしろ驚きを感じざるをえない。戦時下では宣撫工作といって、占領地住民の協力的な態度を引き出すため、治療施設や教育施設がしばしば設置されており、貫式を中国に派遣した西本願寺でも、軍から土地や建物を提供され、布教拠点として各地に出張所や、中国人僧の養成所として南京仏学院を開設したことを考えると、こうした仏教を介した戦時下の取組みが、あるいは中国で調査をする貫式にとって良い方向に影響していたのかもしれない。(同朋大学仏教文化研究所編『戦時下の中国仏教研究―西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録』、同朋大学仏教文化研究所、平成二十八年。藤井由紀子「日中戦争下の留学生―小川貫式資料から(上・下)」、『中日新聞』平成二十九年三月二十八日号・四月四日号掲載予定)。

〔史料紹介〕

西巖寺蔵「小川貫弑資料」より太原崇善寺調査関係資料（口絵一〜四）

「崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の爲め特務機関の援助方申請の件」

「崇善寺蔵経調査備忘録」

「太原崇善寺所蔵宋元版大藏経存欠調査日記抄」

「昭和十六年八月太原崇善寺所蔵宋元両大藏経存欠調査報告書」

高木 祐紀

小川 徳水

藤井 由紀子

昭和十六年（一九四一）七月、五台山の調査を終えた小川貫弑は、山西省の省都である太原に移った。この太原には、西本願寺が置かれていて、貫弑はここをベースに、崇善寺や双塔寺など、市内の主な寺院で大藏経を中心にした調査にとりかかる。特に、崇善寺は、貫弑の行った中国調査のなかでも、最も成果をあげた寺院のひとつである。明時代の洪武十四年（一三八一）、洪武帝の三男が母の供養のため、唐時代の白馬寺跡に再興したと伝えられる古刹であるが、ここで貫弑は白雲宗が開版

したという、元時代の南山普寧寺版の大藏経を発見した。貫弑によれば、これは元時代の江南の仏教信仰を伝える貴重な資料であり、早速、太原に置かれていた山西省の軍特務機関に出向いて、その整理と調査に対する支援を申し入れている。その結果、調査資金と必要物資、さらには、真宗大谷派の学僧であり、特務機関員でもあった菊地宣正の協力を得て、貫弑は約一ヶ月間の調査に臨むことになった。

本稿で紹介する四種の記録は、この崇善寺大藏経の調査に携わったと

きのものである。すなわち、最初の「崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の爲め特務機関の援助ヲ申請の件」は、特務機関に支援を求めたときの申請書の草稿で、当該寺院で調査に着手するに至った経緯が判明するし、「崇善寺藏経調査備忘録」と「太原崇善寺所藏宋元版大藏経存欠調査日記抄」は、調査の際、逐次記された覚書と日誌類で、戦時下で經典調査に取り組んだ研究者の生の声を伝える貴重な資料だといつてよい。さらに、「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋元版大藏経存欠調査報告書」は、カーボン紙を使用していることから、特務機関に提出した、いわば調査の成果物であったと考えられる。

こうした記録類を通して、特に注目されるのは、崇善寺の經典調査に軍の特務機関が積極的に関与していた、という事実である。日中戦争時、この特務機関は中国の各地に置かれ、さまざまな情報を収集する機関として機能していたとみられるが、こうした古刹の宝物にも関心を寄せて、必要経費のほか、筆・墨・紙などを支給していたことや、機関員を調査現場に派遣して、こまめに調査の様子を報告させていたことなど、戦時下における文化工作活動の一環として、情報収集が実際にはどのような形で行われていたかが、具体的に明らかになる。また、山西省は日本に協力した中国人の数も多かった地域であるが、この調査も崇善寺の中国人僧侶との連携のもと行われており、仏教というものを介した日本人と中国人との関係がどのようなものであったか、教えてくれる点でも示唆的である。さらには、太原西本願寺の様子や、道端良秀という

大谷派の仏教学者が見学を訪れた時の様子など、西本願寺の興亜留学生として中国の地で調査にあたった貫式をとりまく人間関係や環境が垣間見える点も大変に興味深い。

現在、崇善寺の大悲殿の東西両房には、積砂版大藏経、元版大藏経、明版大藏経などが保存されていると聞く。今回紹介する記録には、貫式たちがこの崇善寺の普寧寺版を大切に扱い、調査終了後、特務機関から保存用の白布や新聞紙を調達して、丁寧に梱包し、崇善寺に戻した様子も記されているから、大悲殿両房に蔵されている大藏経のなかに、貫式が発見し、整理した大藏経も含まれているとすれば、中国仏教史上の貴重な經典類が、貫式たちの調査を経て、今日まで伝えられた可能性があり、本記録類はこれらの資料群その過程を示すものとしても注目される。

〔凡例〕

一、漢字は原則として現行の字体を用いた。ただし、異体字などをそのまま用いたものもある。

一、本文の改行は「／」で示した。

一、句点は、原史料にしたがって「。」と「。」との双方を用いた。

一、史料二～四については、いずれも太原の崇善寺で約一ヶ月行われた調査の記録であり、それぞれ日誌風に日付を追って記されているため、翻刻するにあたっては、対比上の便を考えて、三段の表形式を採用した。なお、史料四は、冒頭の目録によると、六項よりなる報告書であったと想定されるが、紙幅の都合上、別冊となる第四項・第五項は割愛し、第三項までの翻刻にとどめた。なお、第六項の「調査会計報告書」は、現在、西巖寺には蔵されていない。

史料一（口絵一）

「崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の爲め特務機関の援助方申請の件」

崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の爲め／特務機関の援助方申請の件

今度蒙疆山西各地に現存せる漢文大藏経の學術研究のため、／今月廿五日来原、目下崇善寺大藏経を見学中の者にて候。今春五台山／特務機関員酒井、菊地両氏により崇善寺に宋元版磧砂延聖禪院本／大藏経の存在することが内外各新聞雑誌に報道され、学界の未聞として／学界は詳細なる存欠調査報告を待望する状態にて候。今般／小生も、支那仏教史研究の一学生として待望の余り来原した一人にて／一昨日来見学中、従来の磧砂版大藏経には大・小二部の大藏経が存する／外に、新しく杭州南山大善寧寺版大藏経一部を発見し、これ亦大陸／に於ては、雲南省立図書館に其残欠をみるのみにして大陸の學術文化研／究に欠く可らざる貴重なる資料にて候。而もこの善寧寺大藏経は六千数百／卷一千数百部の、大仏教叢書にして、他蔵に見ざる典籍を収める／単なる個人的な調査のみでなく、他蔵の混／合と分離して整頓し、その存欠を詳細にして嚴重なる保管をすることが目下の急務と心得候。小生の旅行目的は大藏経の研究調査／なるも、ここ兩三日にて所要の目的は完了致すべく候へ共、若し一貴機関に於て／その存欠調査整理ツマに対する御理解と御援助を賜り他に二、三の助手の援助にてこれを為／し社会公共の爲め献身努力の熱意にて候。／

史料二〇四（口絵二〇四）

〔崇善寺藏經調査備忘録〕

〔太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査日記抄〕

〔昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋・元両大藏經存欠調査報告書〕

崇善寺藏經調査備忘録

崇善寺藏經調査備忘録

七月廿日 西本願寺藤谷主任の案内で崇善寺に詣し、住持廣浄師に面会す。宋磧砂版／大藏經の一帙を見学し明日よりの調査を約し帰途図書館に深尾主任を訪／れ書庫漢籍を見て帰る。／

七月廿七日 早朝より崇善寺にゆき宋版經庫を開してその外に元の南山善寧寺版大藏經一藏の存在／するを發見したり。／

七月廿八日 崇善寺藏經調査。正午菊地機関員、岩上画伯來寺。東道にて／博物館の見学をなし午後再度崇善寺にて藏經の調査をなす。／

太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査日記抄

太原崇善寺所藏

宋元版大藏經存欠調査日記抄

昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋・元両大藏經存欠調査報告書

昭和十六年八月

山西省太原崇善寺所藏／

宋・元両大藏經／存欠調査報告書

目録

- 一、 宋元版大藏經存欠調査日記抄
- 二、 宋版磧砂延聖禪院大藏經概説
- 三、 元版普寧寺版大藏經概説
- 四、 宋版磧砂延聖禪院大藏經存欠目録（別冊）
- 五、 元版普寧寺版大藏經存欠目録（別冊）
- 六、 調査會計報告書

七月廿九日、菊地機関員の東道にて特務機関文教班に挨拶し、崇善寺大藏經整備／の後援を申請す。佐藤中尉の案内で恩田補佐官／に面会要談をなす。午後再度予定表を製作して出頭佐藤中尉殿に提出す。／

七月卅日 午前崇善寺にて大藏經調査をなし午後特務機関に出頭、特務機関より／崇善寺大藏經整備存欠目録の製作を約束し筆耕、其他目録製作費として百円の下附をさき、／筆墨紙の支給を受けて帰る。／

七月三十一日、菊地機関員と二人で本格的に大藏經の整備に着手。その手法は千字文番号順にカー／ドをはさみそれに存欠を記入し、各経本の配置を経つて、これを包装しそのときカードをぬきとりて目録製作に着手する方法をとり正確を主義となす。一応並べ始む。第一日は約一千二百巻／をなす。元管主八施入五台山菩薩院本教冊を発見す。佐藤中尉殿来寺視察あり。

八月一日、雨なるも早朝より配置に従事す。大殿中は寒さを覚ゆ。夕刻まで全力で約一千巻を並べ終る。西夏文藏經の断簡／を発見す。／

八月二日 前日通り九時より配置に着手す。天気よく案内はかとりて今日は三千二百巻まで整頓す。北宋福州東禪等覺院／藏經の零本出ず。期待する福州の東禪等覺院本大藏經の出現なく不思議なり。／

七月二十九日、小川菊地機関員の東道にて山西省特務機関に来原の挨拶をなし、佐藤宗教係、鈴木文教班長、恩田補佐官に面会／し崇善寺大藏經ノ重要性ヲ説明シテ整備可否ニ付懇談セリ／

七月三十日、午前中崇善寺にゆき、午後省特務機関に出頭し機関／より崇善寺宋元版大藏經存欠目録の製作を委嘱さる。目録製／作要する材料支給を受く。／

七月三十一日、今日より毎日午前九時より午後六時に至るまで崇善寺に於いて大藏經の調査を始む。整備の方法は千字文と通番号をカー／ドに記入し一応順序に配列をなす。昔経散乱シ寸余ノ塵埃ニマミレテ整理意ノ如クナラス午後佐藤機関員（マ）の来寺視／察を受く。第一日は約一千二百巻を並べ終る。／

八月一日、雨天なるも早朝より藏經の配置に従事す。この日元僧録／管主八の施入せる五台山菩薩院の秘密仏典教冊を発見す。大／殿中は寒さを覚ゆるも夕刻まで頑張りて二千二百巻まで並べ終る。／

八月二日、前日通り九時より配備にかゝる。天気よく今日は案内量どり／て三千四百巻まで進む。該寺は大正時代常磐大定博士の来原のとき北宋福州版大藏經教冊を拝見されしことあり、今年北京よりの調査研究員の話に現存の由を聞く、これを見学するも今調査の目的なり。福州版／の出現を待望してやまず。／

七月二十九日 小川菊地機関員ノ東道ニテ山西省陸軍特務機関ニ来原ノ挨拶ヲナシ、佐藤宗教係、鈴木文教班長、恩田補佐官ニ面会シ、崇善寺大藏經ノ重要貴重ナル事ヲ説明シテ整備可否ニ付懇談セリ／

七月卅日 午前中崇善寺ニ行ク午後省特機ニ出頭シ、機関ヨリ／崇善寺宋元版大藏經存欠目録ノ製作整理ヲ委嘱サル、目録製作ノ材料若干ノ支給ヲ受ク、／

七月卅一日 本日ヨリ毎日九時ヨリ十八時ニ至ル迄テ崇善寺ノニ於テ大藏經ノ調査ヲ始ム 整備ノ方法ハ千字文ト通番ノ号ヲカードニ記入シテ一応順序ニ配列ヲナス藏經散乱シ寸余ノ塵埃ニマミレテ整理意ノ如クナラス。午後佐藤機関員ノ視察アリ、第一日ハ約一千二百巻ヲ並べ終ル／

八月一日 雨天ナルモ早朝ヨリ藏經ノ配列ニ従事ス、此ノ日元僧録／管主八ノ施入セル五台山菩薩院ノ秘密仏典教冊ヲ発見ス、大殿中ノハ寒サヲ覚ユルモ夕刻マデ頑張ツテ二千二百巻マデ並べ終ル／

八月二日 前日通りニ開始シ案内進ム三千四百巻マテ進ム、該寺ハ／大正時代常磐大定博士ノ来原ノ時北宋福州版大藏經教冊ヲ／発見サレシ事アリ、今年北京ヨリ調査研究員ノ話ニ現存ノ由聞クモ出現ヲ待望シテヤマス／

八月三日、前日に変わらず同時刻に着手するも昨日のつかたで、仕事はかどらず四千巻許までを整理す。此日は寺に念経ありて人士の出入多く調査に不便なれば午後三時迄に中止して帰途に就く。

八月四日、今日は昨日休息に元氣を得て頑張つて元版を最後まで整頓し、小大藏積砂版の整備に着手す。前日の骨休めてうんと馬力をかけて完了したり。西本願寺藤谷主任の来寺見学あり吾等を慰問さる。

八月五日、菊地機関員は午前中特務機関に中間報告の爲め出頭す。午後来寺宋積砂小藏版の整頓に着手す。高原機関員と整備方法を相談す。元藏五百五十函分の包布を整備する話あり。菊地機関員目録製作費百円受領し帰る。マント五十円。

八月六日、急用の爲め整備事業中止。休憩となす。家にて積砂版目録のカーボン復写。

八月七日、菊地機関員機関会議に出席す。元版藏經の刊記を書写し、午後図書館にて藏經参考文獻を見学の読書をなし、夜は積砂藏の復写をなす(弁当マント三十円)。

八月八日、午前双塔寺に大藏經有無調査にゆき、午後は積砂藏の復写をなす。弁当代一元。高原機関員罰代五帖を機関より届けうる。

八月三日、此日寺に法会あり人士の出入多く調査の事業に不便なり。整頓意の如く量どらず。午後三時に中止す。四千余巻まで終る。

八月四日、昨日午後の休息に元氣を得て今日は五千巻まで配置す。西本願寺藤谷主任の来寺あり慰問を受く。

八月五日、菊地機員省特機の中間報告にゆく。高原氏婦原あり崇善寺大藏經の調査整理と将来の保管方法を談す。元版藏經の整頓を終る。菊地機員目録製作費を受領し帰る。

八月六日、積砂版小藏經の整頓に着手す。大般若六百巻・大宝積經・涅槃經は宋積砂版大藏經と同一版本なるも装禎は全く異なる。調査の結果至正九年版四大部經にして積砂版に非ることを判明せり。

八月七日、菊地機員省特機の会議出席のため午前中休む。元版藏經の刊記を終日書写す。

八月八日、小藏經の整頓を終る。今日西夏文字大藏經の断片、扉画の說法図三分の一頁と天牌の一頁の僅かに二頁大のものなり。西夏文字は二十八字を存す。これ西夏王李元昊と野利仁榮の製作に係る文字にして西夏学の貴重資料なり。この西夏文大藏經は元大徳年間に松江府僧録管主八が聖旨を奉じて杭州路大万寿寺に於いて彫印せる三千六百二十余巻本にして今日崇善寺より発見せるものは正しくその断片なることを信す。

八月三日、該寺ニテ法要アリ 人士ノ出入多ク調査ノ事業ニ不便ナリ

八月四日 西本願寺藤谷主任ノ慰問激励ヲ受ケ五千巻迄行ク

八月五日 菊地ハ中間報告ニ機関ニ出頭ス、高原機関員ノ婦ノ寺ニテ藏經保管ノ件ニ付談ス、目録製作費受領ス

八月六日 積砂版小藏經ノ整頓ニ着手ス 大般若六百巻大宝積經涅槃經ハ宋積砂版大藏經ト同一版本ナルモ装禎ハ全ク異ル、調査ノ結果至正九年版四大部經ニシテ積砂版ニ非ル事判明セリ

八月七日 菊地機員五台山座談会出席ノタメ午前中休ム、元版藏經ノ刊記ヲ調査ス

八月八日 大般若六百巻・大宝積經・涅槃經ノ整理終ル。学界問題ノ「西夏文字大藏經」ノ断片扉画ノ說法図ノ三分の一頁ト天牌ノ一頁ノ僅カラ発見ス。「附記」…西夏文字ハ二十八字ヲ存ス 此ハ西夏王李元昊ト野利仁榮ノ製作ノ二係ル文字ニシテ西夏学ノ貴重資料ナリ 此ノ西夏文大藏經ハ元大徳年間ニ松江府僧録「管主八」ガ聖旨ヲ奉ジテ杭州路大万寿寺ニ於テ彫印セル三千六百二十余巻本ニシテ今日崇善寺ヨリ発見セルモノハ正シク其ノ断片ナルモノト信ス

八月九日 宋磧砂版ヲ書架ヨリ取出し千字文順ニ配列ス、(第一日) /

八月十日 (第二日) 宋版整理配列第二日。宋版中二元版普寧寺本及び明版南京版大藏經ヲ混合セリ。 / 中国仏教後援会弁事員、大藏經千字文書写ヲ委託ス、 /

八月十一日 (第三日) 宋版整理配列第三日。 /

八月十二日 (第四日) 宋版整理配列。第四日。 / 午後明南藏残欠本整理をなす。 /

八月十三日—十五日 佐藤中尉来寺慰問サルモ、不在ナリ。菊地元版目錄製作、西本願寺ニ孟蘭盆ノ為メニ休ミヲ /

八月十六日 大谷大学道端教授来寺。參觀アリ。午後ハ博物館図書館東道ス / (昼食フランス料理)

八月十七日 菊地宋版カード調査、小川元版刊記書写(午前) / 宋版書架整納(第一日) /

八月十八日 宋版書架整納(第二日) 午前午後 / 大谷大学道端教授来寺參觀(夕食英樺飯店三人会食ス。高原機関ニユキ包装新聞紙ヲ持參サル。 /

八月九日、磧砂版に混入せる元版の抽出のため磧砂版 / 書を架より取出し千字文順に配列す、(第一日) /

八月十日 宋版整理第二日、宋版中より元普寧寺版、明南京大報恩寺版を数 / 十冊抽出す。今日より崇善寺中国仏教後援会弁事員を動かして藏經千字文 / を書かしむ。 /

八月十一日、宋版整理第三日、前日は全く元版を発見す。宋福州開元寺本大藏經 / 零本数冊を見出す。然し有るべき東禪等覺院本未だ発見されず。 /

八月十二日、宋版整理第四日、一応配置を終り、午後明南京版大藏經にカードを / はさみ整理を終る。明南藏は零本なるも万曆二十年前後の刻本なり。 /

八月十三日、十四日、十五日、孟蘭盆法会のため調査を中止し家にありて / 宋・元版存欠目錄の復「ママ」写をなす。 /

八月十六日、抽出零本を配備して宋版大藏經のカードの調査整理をなす。大谷大学道端良秀 / 教授来寺大藏經參觀、道端教授の指導を仰ぐ。 /

八月十七日、元版刊記の書写をなし、午後より宋版を書架に整納して / 納む、(第一日) /

八月十八日、宋版を書庫に納む、(第二日) 道端教授の指導をうく。 / 高原氏機関より元版包装用の新聞紙を届けらる /

八月九日 磧砂版ニ混入セル元版ヲ抽出ノタメ磧砂版ヲ書架ヨリ取出シ / 千字文順ニ配列ス /

八月十日 宋版中ヨリ元普寧寺版、明南京大報恩寺版ヲ数冊抽出ス / 中国仏教後援会弁事員ニ藏經ノ千字文ノ筆耕ヲ依頼ス /

八月十一日 前日同様ニ整理中元版、宋福州開元寺本大藏經零本 / 数冊ヲ見出す、然シテ東禪等覺院本未タ発見セス /

八月十二日 整理配列終リテ明南京版大藏經ノ精査ヲ開始ス 此ノ經ハ / 萬曆二十年前後ノ印本ナリ /

八月十三日 孟蘭盆法会ノタメ調査中止シテ宿舍ニテ宋・元両版ノ存欠 / 目錄ヲ製作シ其ノ復(ママ)写ヲ宮崎長野ノ依頼ス 十四、十五日同様 /

八月十六日 抽出セル元・宋ノ藏經ヲ精査シテ抽入セリ、大谷大学道端 / 良秀教授来寺アリテ指導及懇談シテ研究セリ /

八月十七日 元版刊記ヲ研究調査シ、宋版ヲ書架ニ納ム /

八月十八日 宋版ヲ書架ニ納メ終リ、高原・道端ノ来寺ニヨリテ元版ノ包 / 装ニ付研究シ新聞紙ニテト云事ニ定マリ 高原機関ヨリ新聞紙ヲ受領シ来レリ /

八月十九日 宋版書架整納(第三日) 残本宋元本別書架ヨリ発見ス。／元版藏經包裝、千字文付開始。小川元版刊記筆写。／

八月十九日、宋版を書架に納む(第三日) 午後別の書架より宋・元版大藏經零本を／数十冊発見す。福州宋版大藏經の零本中に／華嚴經卷第二 日本国僧慶政捨／と刊記のある一帖を発見す。鎌倉時代に(南宋寧宗嘉定年間)我日本僧慶政上人が渡海して／福建に大藏經を求めたとき旅費を喜捨して板木を補刻したるものなり。七百余年前に慶政上人喜捨の刊記ある福州版大藏經は僅めて少く／旧西山法華寺藏の現宮内省図書寮本には華嚴經卷二十二、涅槃經卷三十三に／あるのみ崇善寺新出の華嚴經卷二の日本国僧慶政捨の刊記は学／界未聞のものにして日華仏教文化交流史上の貴重資料なり。／

八月二十日、菊地元版藏經包裝 千字文付、(菊地)小川元版刊記筆写。／佐藤中尉來寺、慰問サル。小川宋版目錄製作(夜)／

八月二十日、今日より元藏の新聞紙包装を始め。別記の如く元大藏經は学会重要なる遺物なれば可及の保管方法を考へ、種々対策を構じたるに経費の都合にて遂に紙魚、塵埃、散佚を防ぐ意より新聞紙を用ふ。／佐藤機員の慰問あり。／

八月二十一日、小川元版刊記筆写。菊地元版包裝。／午後、巻端 道端阿氏來寺。夕食菊地、本願寺慰安会食ス／金刻華嚴經発見す。／

八月二十一日、元版包裝第二日、菊地終日糊にまみれて包装にかゝる。／小川は元版刊記筆写に一日をついやす、巻端氏來寺參觀、／道端教授指導、金刻華嚴經を十数冊発見す。／黄紙折本なるも元來卷子本にして北宋神宗より金の皇統泰和の刊記を有し六百六十年前になる学界貴重本なり。北宋官版遼金大藏と同じく十五行字詰でその覆刻に非ざるかと思はる。

八月二十二日、元版包裝。(二百五十一三三〇) プドウ酒、一本、(菊地)／
晴道端氏來寺。高原先生ヨリ茶菓ノ応待ヲウク。／

八月二十二日、元版包裝第三日、二人して終日包装するも百帙余にて夕刻となる。道端教授指導。高原氏より茶菓の応待をうく。／

八月十九日 別ノ書架ヨリ宋元両版大藏經零本教冊発見ス。福州宋版大藏經ノ零本中ニ華嚴經卷第二「日本国僧慶政捨」ト刊記ノアル一帖ヲ発見ス。附記：鎌倉時代ニ南宋寧宗嘉定年間我日本僧慶政上人ガ渡海シテ福建ニ大藏經ヲ求メタル時旅費ヲ喜捨シテ板木ヲ補刻シタモノナリ、七百余年前ニ慶政上人喜捨ノ刊記アル福州版大藏經ハ僅メテ少ク旧西山法華寺藏ノ現在宮内省図書寮内ニハ華嚴經卷三十二涅槃經卷三十三ニアルノミ、今回ノ発見ハ学界未聞ノモノニシテ日華仏教文化交流史上ニ貴重資料ナリ。／

八月二十日 元版大藏經ヲ新聞紙包装ヲ始ム、別記ノ如ク元版大藏經ハ学ノ界ニ貴重ナル遺物ナレバ可及ノ保管ノ保管方法ヲ考へ、各種都合上散逸ヲ防グタメニ包装ヲ初ム 佐藤機員ノ激励ヲ受ク。／

八月二十一日 巻端氏來寺參觀、金刻華嚴經十冊発見ス、道端教授指導受ク。／
附記：金刻華嚴經ハ黄紙折本ナルモノ元來卷子本ニシテ北宋神宗ヨリ金ノ皇統泰和ノ刊記ヲ有シ六百六十年前ニナル学界ノ貴重ナル資料ノナリ、北宋官版遼金大藏經ト同ジク十五行字詰テ其ノ覆刻ニ非サノルカト思ハル。／

八月二十二日 元版大藏經ノ書架ヲフマキユーラニテ消毒ス、元版ノ包装ス。元延祐二年福建、建陽版毘盧大藏經ノ大方廣佛華嚴經卷二十八ノヲ発見ス。附記：元建陽版ノ經ハ從來大般若經大宝積經ノミトサレシモ、今ノ回ノ華嚴經ノ発見ニヨリ更ニ一ツヲ加フニ至レリ。／

八月二十三日、(晴)午前八時道端、菊地、野中諸兄共ニ晋詞鎮・七月大会見学ノ為メ、元蔵包装ノヲ中止シ一日ノ情遊ヲナス。部隊慰問(五・〇〇)、昼食(四・〇〇)道端先生支払、ノ

八月二十四日、元版包装、新郷・藤井両氏深尾主任来寺參觀ノ三二(一五〇〇帙)ノ

八月二十五日、元版包装完了。元蔵ヲ経庫ニ収ム。正午ヨリ特別資料経典ノヲ写真シ。道端教授来寺。小川目録書写、ノ

八月二十六日、午前菊地、小川特務機関出頭中間報告。午後包装セシモノヲ書庫ニノ収ムノ

八月二十七日、午前休。午後崇善寺ニテ刊記書写。写真屋ニユク、ノ

八月二十八日、目録復写製作(於西本願寺婦人会館)ノ

八月二十九日、目録復写(於西本願寺幼稚園) (活)ノ

八月三十日、目録復写、(於西本願寺幼稚園)ノ

八月二十三日、元版包装第四日、一日頑張つても意の如ク進まず蠅が多くてフマキノヲを散布して頑張る、ノ

八月二十四日、元版包装第五日、午後東本願寺開教監督新郷氏一行、深尾図ノ書館博物館主任来寺參觀、種々会談す。ノ

八月二十五日、元版包装第六日、今日で包装を終る。正午道端教授指導の下に貴重ノ仏典を写真に撮る、学界未聞の仏典を試写す、ノ

八月二十六日、午前菊地、小川省特務機関に中間報告のため出頭す。午後包装ノせる元版を書架に納む。ノ

八月二十七日、終日包装した元版大蔵経を書架に納め終る。蔵外仏典の調ノ査をなし、その刊記を書写す。元至正二十五年版華嚴經三十余帖ヲ發見ス。一紙二十五行十五字詰にして磧砂版元普寧寺版本ト異なる。然シ磧砂版ノ此ノこ至正二十五年本を以て補充し同一装禎をなせるより崇善寺所蔵ノ磧砂版の印刷年代は元末か明初なるものである。先年西安臥龍ノ寺開元寺發見ノ磧砂版より印刷年代は下るものと考へる。ノ

(※最終ページは計算メモのため割愛)

八月二十三日、元版大蔵経包装セルモ意ノ如ク進マズノ

八月二十四日、元版大蔵経包装ヲ進マシム、東本願寺開教監督新郷氏一行ノ深尾図書館博物館主任參觀ニ来ルノ

八月二十五日、元版宋版其ノ他貴重ナル仏典ヲ道端教授ノ指導ノ下ニノ撮影ヲ行フノ

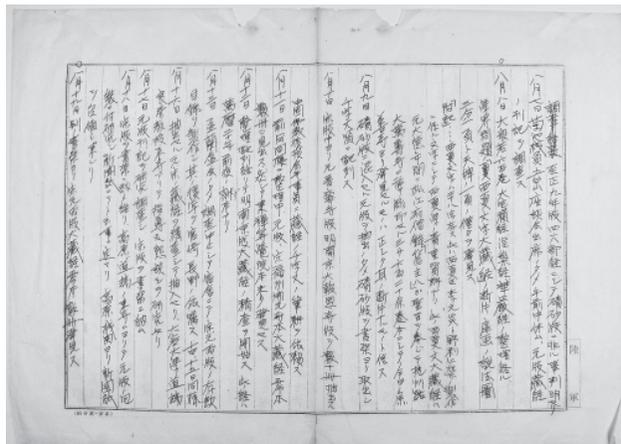
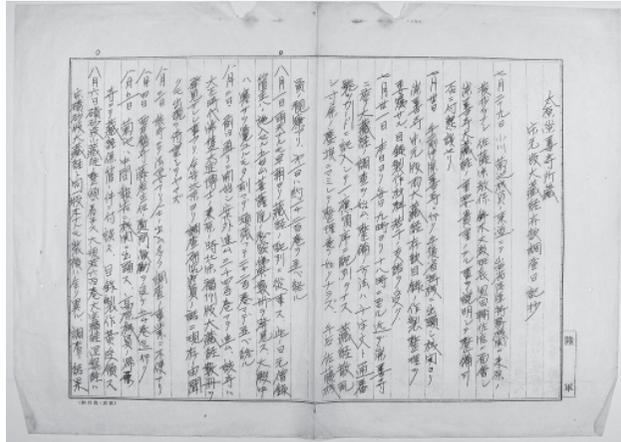
八月二十六日、特機ニ中間報告ノ出頭ス、午后元版大蔵経ヲ書架ニノ納ムノ

八月二十七日、蔵外仏典ノ調査ヲナシ、刊記ヲ精調シ、元至正二十五年版華嚴經三十余帖ヲ發見ス。一紙二十五行十五字詰ニシテノ磧砂版元普寧寺版本ト異なる。然シ磧砂版ニハ此ノ至正二十五年本ヲ以テ補充シ同一装禎ヲナセルヨリ崇善寺所蔵ノ磧砂版ノ印刷年代ハ元末カ明初ニナルモノデアアル、先年西安臥龍ノ寺開元寺發見ノ磧砂版ヨリ印刷年代ハ下ルモノト考へルノ

八月二十八日―九月三日ノ元版宋版其ノ他ノ仏典調査セシ整理報告書製作ノノタメ西本願寺ニ於テ事務ヲナセリノ

(※以上はカーボンコピー、菊地宣正筆カ)

挿図 「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋元両大藏経存欠調査報告書」 第2紙、第11紙



太原崇善寺所藏續砂延聖院版大藏経概説

一、該大藏経部帙卷数

自天字函至煩字函 五百九十一帙
一千五百二十一部 六千參百拾卷

崇善寺

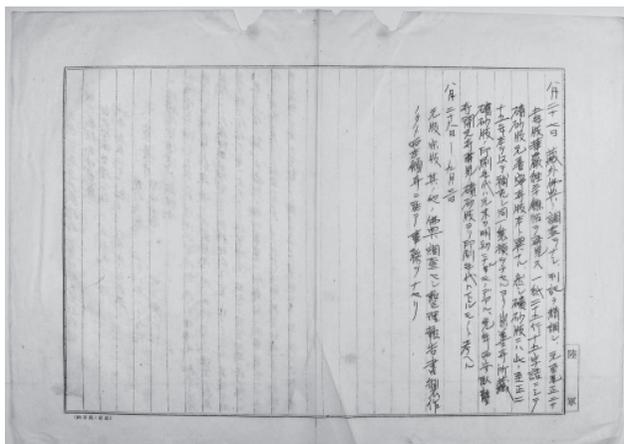
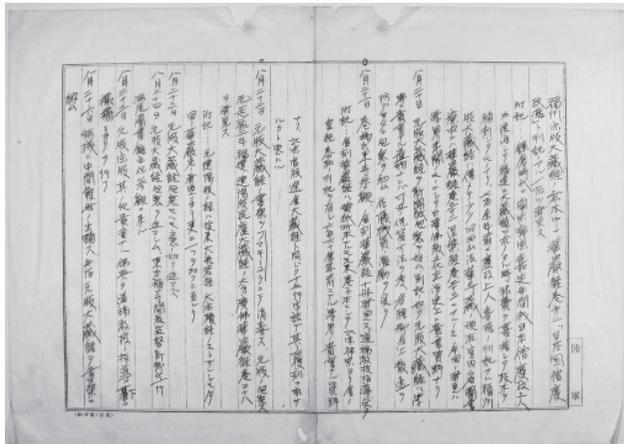
現存冊数 四千八百二十九帖
散佚冊数 九百零六帖

二、續砂延聖院版大藏経局

元僧円至ノ撰文ニナル乎平江府陳東府陳湖延聖院記ニ
抛レバ該禪院ハ南宋ノ孝宗ノ乾道八年僧寂堂ノ創建
ニ係リ、大藏経局ハ院ノ北坊ニアツタ、理宗ノ紹定
ノ年間ニコノ大藏経局ガ開設サレテ刻経印刷事業ヲ
始メタノデアル。其後二十余ノ年ヲ経テ宝祐六年ニ
大火アリテ延聖院ハ燬堂ト寂堂和尚ノ塔ヲ除キ他
ノハ悉ク烏有ニ帰シ大藏経ノ雕印事業ハ全ク頓座シ
開慶、景定ノ四・五年ノ間ハソノ活動ヲ見ルコトガ出
来ナカツタ、コノ大火ニ以前ニ刻ンダ経板ガ多少類
焼ヲ見タカモ知レナイガ、大多數ハソノ難ヲマヌ
ガレテ景定五年ニ至リ再ビ刻経事業ノガ復興シ度宗
ノ咸淳年間ハ華々シイ活動ヲ見タノデアル、然ルニ
南宋末元初ノ兵ノ乱ニ禍ヲ受ケ再度ノ事業中止ノヤ
ムナキニ至ツタ、元成宗ノ大徳年間ニ至リ再興ノ
緒ニ就キ雕版刻経ノ事業モ盛ントナリ殊ニ松江府僧
録管主八ノ後援ヲ受ケノ中統鈔式伯錠ノ施入ニヨリ
一年ナラズシテ未完成經典一千有余卷ノ雕印ヲナシ
ノ至大、延祐、至治年間ニ及ンデ全藏ノ完雕ヲ見タ
ノデアル、

三、該大藏経局ノ組織制度

上述ノ如ク續砂版大藏経ハ南宋ノ理宗、度宗ノ時
代紹定、嘉熙、淳祐、宝祐ノ景定咸淳ニ至ル約
二十五ヶ年ト元ノ成宗武宗、仁宗英宗ノ時代即チ大
徳ノ至大、皇慶、延祐、至治ノ二十五ヶ年、併セテ
宋元両代五十年間ニナル木版印刷ノ大藏経デアルガ、
ソノ刻経処トナツタ大藏経局ハ極メテ完備セル系統
組織ヲ以テナサレタノデアル、刻経処ヲ主管スル
管局僧、提調僧ノ下ニ勸縁僧、勸縁道ノ者、都勸縁
者ガ平江府、嘉興府下ノ各地有縁者ヲ教化募財シ、
經刻処デハノ板下ノ書写經典ノ文字ノ異同ヲ正ス対



【特別調査報告】西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)

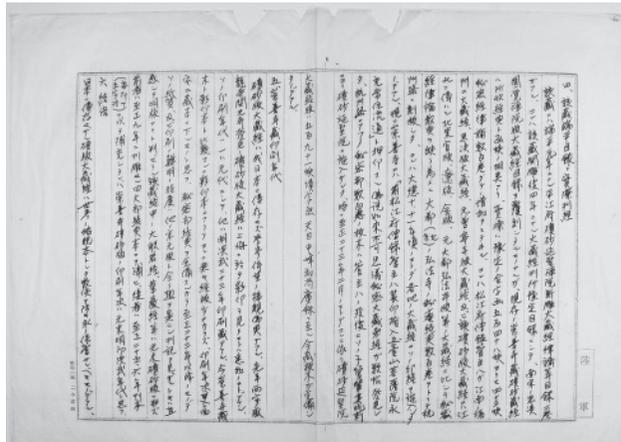
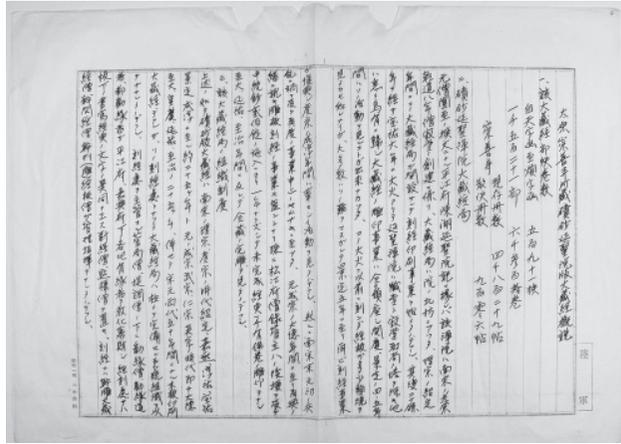
經僧、点様僧ヲ置キ、刻經ニハ幹離大蔵／經僧、幹開經僧、幹刊(雕)經板僧ガ管理指揮ヲナシタノテアル、

四、該藏端平目錄ト實際刊經

該藏ニハ端平元年ニナル平江府磧砂延聖禪院新雕大藏經律論等目錄二卷／ガアル、コレハ該藏開雕後四年ニナル大藏經刊行予定目錄ニシテ、南宋ノ思溪／円覚禪院版大藏經目錄ヲ覆刻シタルモノナルガ、現存ノ崇善寺藏磧砂藏經／ハ所収經典ト函帙ノ相異アリ、實際ハ予定ノ合字函五百四十八帙ヨリモ四十三帙／秘密經律論數百卷ダケノ増加ヲミテキル、コレハ松江府僧錄管主八ガ江南ノ福／州ニ大藏經、思溪版大藏經、元普寧寺版大藏經、及ビ該磧砂版大藏經ニハ江ノ北ニ伝ハル北宋官版、遼版、金版、元大都弘法寺版等ノ大藏經ニ比シテ秘密／經律論數百卷ヲ欠ク為メニ大都(北京)ノ弘法寺ノ秘密經經典數百卷ヲトリテ杭／州路ニ刻板シタ、コレハ大徳十、十一年頃ノコトデ、各地ノ大藏經ニソノ印經ヲ施入シタ／ノデアル、現ニ崇善寺ニハ「前松江府僧錄管主八装印捨入、五台山菩薩院永／充常住流通」ト押印スル仏說如來不可思議秘密大乘經方數帖發見シ／タ、杭州路ニアツタ秘密部數百卷ノ板木ハ管主八ノ歿後、ソノ子管輩其吃刺／ニヨリ磧砂延聖院ニ施入サレタ、時ニ至正二十三年二月ノコトデコレニ依リ磧砂延聖院／大藏經版ハ五百九十一帙煩字函天目中峰和尚広録ニ至ル全藏板木ガ完備シ／タノデアル、

五、崇善寺藏印刷年代

磧砂版大藏經ハ我日本ニ伝存セズ学界待望ノ稀觀仏典デアアル、先年西安ノ臥／龍寺開元寺発見ノ磧砂版大藏經ハ上海ニ於テ影印ヲ見タコトハ悉知ノコトデアアル、ソノ印刷年代ハ一ハ元代ニシテ、他ハ明洪武二十三年印刷藏デアアル、今崇善寺藏ノ木(ママ)ト影印本ト比較スルニ影印本ニアリテコレニ無キ經板少ナカラズ。印刷年次ハ更ニ西ノ安ニ藏本ニ下ルモノト思フ、秘密部經典ヲ完備スルカヲ至正二十三年以降ノモノデ／ソノ紙質、及ビ印刷ノ鮮明ノ程度ハ他ノ宋元版ト全ク趣ヲ異ニシ刊記ヲ見ザルトキハ



直／感シテ明版ナリト判ゼラル、該藏經中ノ大般若經、華嚴經等ハ元來磧砂版ニ非ズ／前者ハ至正九年ニ刊雕セル四大部經典本ニテ補ヒ、後者ハ至正二十五年、六年刊本／（毎行十五字詰）ヲ以テ補充シタレバ崇善寺磧砂版ノ印刷年次ハ元末明初洪武年代ト思フ、

六、結語

日本ニ伝存セザル磧（マ）版大藏經ハ世界ノ稀觀本トシテ散佚ヲ防キ永ク保管サルベキモノデアアル、

太原崇善寺所藏元普寧寺版大藏經概説

一、該大藏經部帙卷数

自天字函至感字函 五百五十八帙

一千四百二十二部 六千零十卷

崇善寺 現存冊数 四千二百三十二帖、

散佚冊数 一千二百二十五帖、

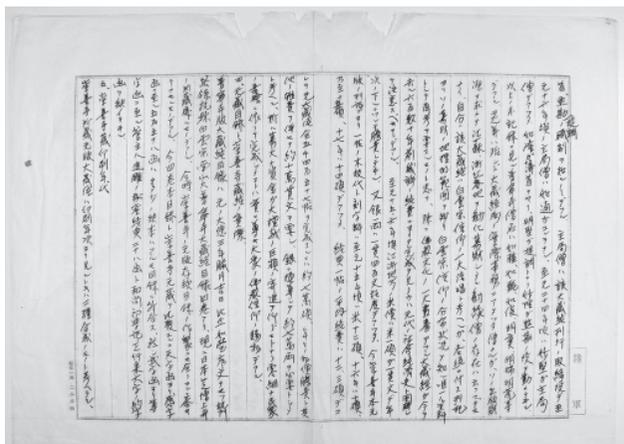
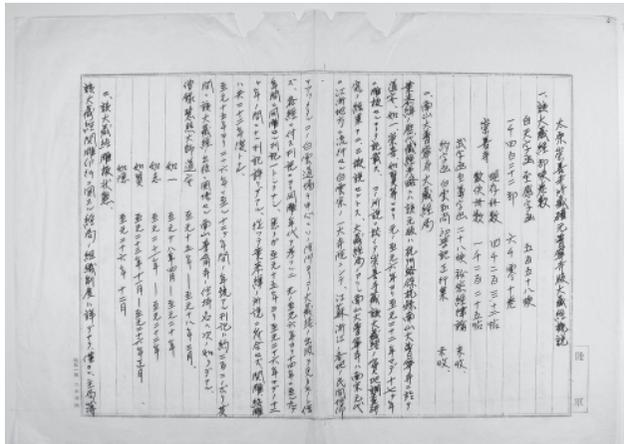
武字函至尊字函 二十八帙 秘密經律論 未収、

約字函 白雲和尚 初学記正行集 未収、

二、南山大普寧寺大藏經局

葉恭綽ノ歴代藏經考略ニハ該元版ハ杭州路餘杭杭甬南山大普寧寺ニ於テ、道安、如一、崇喜、如賢等ニヨリ元ノ至元六年ヨリ至元二十二年マデ十七ヶ年ノニ雕板セルコトヲ記載ス、コノ所説ニ就イテ崇善寺藏該大藏經ノ実地調査研／究ノ結果ヲ二、三概観セントス、大藏經局ノアリシ南山大普寧寺ハ南宋元代、江浙地方ニ流行セル白雲宗ノ一大寺院ニシテ、江浙中心ニソノ信仰ヨリコノ大藏經ノ出版ヲ見タモノト信／ズ、各経ニ付ス刊記ニヨリ開雕年代ヲ考フルニ元ノ至元六年ヨリ至元十四年ニ至ル九ヶ年間ニ開雕セル刊記一トシテナシ、悉クガ至元十五年ヨリ至元二十六年マデノ十二ヶ年ノ間ニ刊記許リデアアル、從ツテ葉恭綽ノ所説ニ符合セズ、開雕、終雕ノハ共二十二年後トナル、

至元十五年ヨリ二十六年ニ至ル十二ヶ年間ノ年号アル刊記ハ約二百二ノボリ、其ノ間ニ該大藏經ノ出版

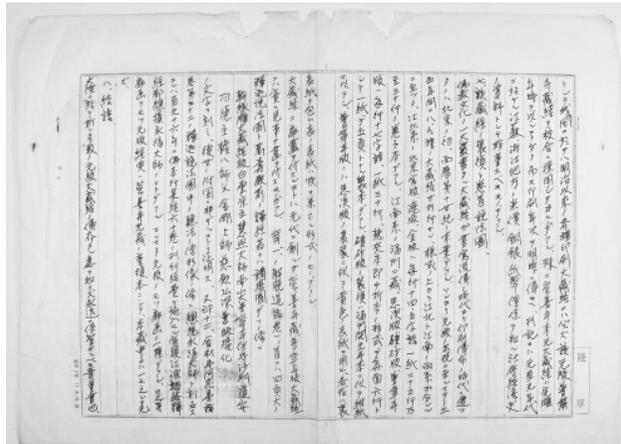
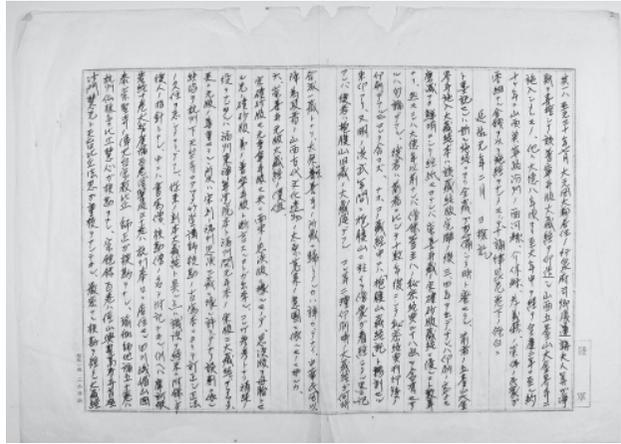


【特別調査報告】西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告(一)

二 関係セル南山普寧寺ノ住持名ハ次ノ如クデアアル、

- | | | |
|--------|----|---------------------|
| 僧録慧照大師 | 道安 | 至元十五年—至元十八年三月、 |
| 如一 | | 至元十八年四月—至元二十年、 |
| 如志 | | 至元二十一年—至元二十二年、 |
| 如賢 | | 至元二十三年十一月—至元二十六年正月、 |
| 如隱 | | 至元二十六年十二月、 |

三、該大藏經雕板狀態、
 該大藏經開雕印行ニ関スル結局ノ組織制度ハ詳デナク、僅カニ、主局、簿ノ首、点勘提調ノ職制ヲ知ルノミデアアル、主局僧ハ該大藏經刊行ノ取締役ヲ至元十六年頃ノ主局僧ハ如通ガコレヲナシ、至元二十四年頃ハ妙堅ガ主局ノ僧デアツタ、如隆ガ簿首ヲヤリ、明堅ガ提調トナリ妙性ガ点勘ノ役ヲ勤メテキル、以上ノ外記録ニ見ル普寧寺僧名ハ如雅、如甄、如俊、明実、明瑞、明亮等デアアル。是等ハ殆ンド大藏經局ノ實際事務ニアタツタ僧ナルガ、ソノ出版財ノ源ヲ求メテ江蘇、浙江各地ヲ勸化募財シタル勸緣僧ノ存在ハ云フマデモナイ、自分ハ該大藏經ハ白雲宗信仰ノ一大結唱ト考ヘルガ、各経ニ付ス刊記ノヨリソノ募財ノ地理ノ範圍ヲ知り白雲宗信仰ノ分布状況ヲ知ル唯一ノ資料トシテ再考ヲ要スルモノト思フ。殊ニ仏教文化ノ一大家書デアラル大藏經ガ今ヲ去ル六百年前幾許ノ経費ニヨリテ完成ヲ見タカハ元代ノ社会経済史ト関連シノテ注意スベキコトデアアル。至元十五、十六年頃江浙(ママ)地方ノ米価ハ米一碩ガ一貫文デ年ノ次ノ下ルニツレテ騰貴シテキル、又銀一兩ハ一貫四百文程度デアツタ、今崇善寺本元ノ版ノ刊記ニヨリ、一帖ノ木板刻ノ字料ハ至元十五年頃ハ米十二碩、十六年八十碩、ノ乃至十五碩、十七年八十四碩デアツタ、經典



一帖ノ平均経費八十二、三碩デコノレヲ元大蔵経全
五千四百五十七帖ヲ完成スルニハ約七万碩、年々ノ
物価騰貴ト其ノ他ノ雑費ヲ併セテ約十萬貫文ヲ要シ、
銀ニ換算シテ約七万両ヲ必要トシタノト考ヘル。斯
ル募大ナ資金ガ大檀越ノ巨額ノ寄進ヲ仰グコトナク
零細ナ民衆ノ喜捨ニ依リテ完成シタコトハ実ニ尊
キ大衆ノ仏教信仰ノ賜物デアル、

四、元蔵目録ト崇善寺蔵経ノ實際、
普寧寺版大蔵経目録ハ元ノ大徳三年膺月吉日比丘如
瑩序文ヲモツ杭州ノ路餘杭臬白雲宗南山大普寧寺大
蔵経目録四卷アリ、現ニ日本芝罘上寺ノ所蔵ニ係
ルモノデアアル、今時崇善寺ノ元版存欠目録ノ作製ニ
モ全クコレニ基キテナセルモノデアアル、今四卷本
目録ト崇善寺元蔵ヲ比較スルニ天字函ヨリ感字ノ函
ニ至ル五百五十八函ハ多少ノ欠本ハアルモ目録ニ符
合ス、然シ武字函ヨリ尊ノ字函ニ至ル管主八追雕ノ
秘密經典二十八函ト和尚初学記、正行集六字ノ約字
ノ函ヲ欠イテキル、

五、崇善寺蔵印刷年代
崇善寺所蔵元版大蔵経ハ印刷年次ヨリ見ルトキハ二
種合成ノモノト考ヘラル、其一ハ至元三十年七月
大元国大都居住ノ行泉府司郷張遵誨夫人等ガ淨ノ財
ヲ喜捨シテ該普寧寺版大蔵経ヲ印造シ山西五台山
大界寺ニノ施入シタルモノ、他ハ大徳八年頃ヨリ至
大年中ヲ経テ皇慶二年ニ至ル約十ヶ年ニ山西ノ異
寧路汾州ノ西河県ノ介休県、孝義県、崇仏ノ民衆
ガノ零細ナル金錢ヲ以テ施経ヲナシタモノデ、十誦
律毘尼卷下ノ余白ニ

延祐元年二月 日檢記ノ
ト墨記セルハ斯ル施経ニヨリ全蔵ガ整備シタ時ト察
セラル、前者ノ五台山大金ノ界寺施入大蔵経本ハ該
蔵経版完雕ノ後三、四年ヲ出デザレバ印刷ノ文字モノ
摩滅ナク鮮明ニシテ経紙モヨケレバ、崇善寺蔵ノ宋
磧砂版蔵経ニ後ルコト数等ノナリ。然モコレハ大徳
年以前ナレバ僧録管主八ノ秘密經典二十八函ヲ含有
セザルハ勿論デアアル、後者ハ前者ニ比シテ十数年
後ニシテ秘密經典刊行後ノ印刷デアアルモコレヲ含

マズ、ナホコノ藏經中ニハ「抱腹山藏經記」ト陽刻セルノ朱印アリ。又明ノ洪武年間ニ抱腹山ニ於イテ僧衆ガ看經シタル墨記ノアレバ後者ハ抱腹山旧藏ノ大藏經デアアル、コレ等二種印刷時ノ大藏經ガ何時ノ合成一藏トナリ、太原崇善寺ノ所藏ニ歸シタルカハ詳カデナイ、中華民國以ノ降為政者ノ山西古代文化遺物ノ太原蒐集ノ意図ニ依ルモノニ非ルカノ六、崇善寺元版大藏經ノ価値、ノ宋磧砂版モ元普寧寺版モ共ニ南宋ノ思溪版ニ拠ルモノデ、思溪版ヲ母胎トセ、ル兄ノ磧砂版弟ノ普寧寺版ト断言スルコトガ出来ル、コレガ参考トナリ補欠ノ役ヲナシタルハ福州東禪等覺院本ト福主開元寺本ノ宋版ニ大藏經デアツタ、ノ更ニ元版ノ尊重セラ、所以ハ宋刻ノ福州思溪三藏ニ拠ル許リデナク誤刻ニ依ルノ欠陥ヲ杭州下天竺寺ニアツタ竹堂講師校勘ノ古写本ニヨリテ訂正シ正法ノ久住ヲ志シタコトデアアル、従来ノ刻本大藏經ト異ル点ハ識語ヲ經末ニ附録シテノ後人ノ指針トナシ、中ニハ書写僧、校勘僧ノ名ヲ附記テキル、例ヘバ摩訶般ノ若經十卷、大智度論百卷、涅槃經三十卷ハ杭州奉口ニ居住セル四川峨嵋山國ノ秦崇聖寺ノ伝天台宗教比丘師正ガ校勘ヲナシ、瑜伽師地論五十卷ハ杭州仙林寺比丘慧心ガ校勘ヲナシ、宗鏡錄百卷ハ径山興聖万寿寺首座ノ沙門慧元ト天台比丘法思ガ重校ヲナシテキル、嚴密ナル校勘ヲ經タル大藏經トシテ我國ニ於テハ明治以來ノ各種印刷大藏經ニハ必ズ該元版普寧ノ寺藏經ヲ校合ニ採用シテキルノデアアル、殊ニ崇善寺本元大藏經ハ完雕ノ年時ヲ以ルコト少ク而モ印刷年次ヲ明瞭ニ伝セ、刊記ニハ元至元年代ノニ於ケル江蘇、浙江地方ノ米価、銅銀、紙幣価値ヲ知ル社会経済史ノ資料トシテ珍重スベキモノデアアル、ノ七、該藏經ノ装領ト巻首說法図、ノ

北系ノ北宋官版、遼版、金版ハ每行十四、五字詰一紙二十五行乃／至三十行ノ卷子本デアル、江南系ノ福州二藏、思溪版、磧砂版、普寧寺ノ版ハ每行十七字詰、一紙三十行、梵夾本即チ折本ノ形式デ每面六行ト／シテ一紙デ五頁トナル製本デアル。磧砂版ノ装禎ハ福州開元寺本ニ似テ紺紙ノヲ以テシ、普寧寺版ノハ思溪版ノ表装ニ似テ黄色ノ表紙ヲ用ヒ、各帖ハ裏ノ表紙ヲ包ム表ノ表紙ハ帙ヲ兼ネル形式ノモノデアル、

大藏經ニ扉絵ヲ付スルコトハ元代ニ創ルガ、崇善寺藏普寧寺版大藏經ノニハ実ニ見事ナ絵ヲ付スルモノガアル、背、一、ノ解脱道論卷一ノ首ニハ四頁大ノ／釈迦說法図ト万寿殿前ノ訳經若クハ講經図デソノ傍ニ

幹縁雕大藏經板白雲宗主慧照大師南山大普寧寺住持沙門道安ノ功德主檐八師父金剛上師慈願弘深普皈撰化ノ

ノ文字ヲ刻ミ、後世ノ付図ニ非ザルコトヲ証明ス。又卽十二、舍利弗阿毘曇論ノ卷第十二ノ釈迦說法圖中ノ聽法ノ僧形像ノ傍ニ總統永福大師ト刻名スノコレハ至元十六年ニ仏本行集經六十卷ノ刊行經費ヲ施入セル宣授江淮諸路積ノ經部都總撰永福大師ノコトデアルコレマタ元版ノモツ扉絵ノ一種デアル、是等ノ扉絵ヲモツ元版經典ハ崇善寺元藏ノ重復本ニシテ、本藏中ニハ一モ之レヲ見／ズ、

八、結語、

大陸ニ於テ斯ル多数ノ元版大藏經ノ伝存スル処ヲ知ラズ永遠ニ保管サルベキ貴重書也、

(※以上はカーボン紙の1枚目にインク書、貫式筆)

小川貫弑略年表

1912	明治45年3月1日	岐阜県各務原の西巖寺に生まれる
1929	昭和4年3月	岐阜県立武義中学校を修了する
	昭和4年4月	龍谷大学予科に入学する
1936	昭和11年3月	龍谷大学文学部仏教史学科を卒業する
1939	昭和14年3月	龍谷大学研究科中国仏教史学科を修了する
	昭和14年4月	西本願寺興亜留学生として中華民国に派遣される 西本願寺立南京仏教学院主事として南京鳳山古林律寺に駐在する
1941	昭和16年7～8月	山西省特務機関の依頼により五台山で調査を行う 五台山顯通寺で行われた日本人求法僧の慰霊祭に参加する 大同で雲崗石窟などを見学する 太原の崇善寺にて元時代の普寧寺版大蔵経を発見する 崇善寺発見の普寧寺版大蔵経を陸軍特務機関の支援を得て調査する
	昭和16年9月	経文の発見など、貫弑の五台山の調査成果が『朝日新聞』で報じられる
1942	昭和17年3月	中国から帰国する
	昭和17年4月	龍谷大学文学部の助手となり、中央仏教学院の嘱託講師を兼任する
1944	昭和19年	西巖寺住職を継職する 龍谷大学専門部講師 兼 司事となる
1945	昭和20年6月	龍谷大学専門部教授 兼 司事となる
1946	昭和21年6月	龍谷大学予科講師を兼ねる
1948	昭和23年4月	龍谷大学司事を兼ねる（図書館勤務）
1949	昭和24年4月	龍谷大学助教授となる（新制大学移管）
1950	昭和25年4月	龍谷大学短期大学部講師を兼ねる
1959	昭和34年4月	龍谷大学教授となる
1961	昭和36年4月	龍谷大学文学部教授となる（経済学部増設）
	昭和36年11月	同朋大学で居士仏教について講演する
1964	昭和39年11月	大蔵会の50周年記念『大蔵会—成立と変遷』を執筆する
1968	昭和43年5月	龍谷大学図書館長となる
1973	昭和48年5月	『仏教文化史研究』を刊行する
1975	昭和50年4月	各務原市文化財審議会委員となる
1980	昭和55年3月	龍谷大学を退職し、名誉教授となる
2006	平成18年9月29日	死亡（享年94歳）

執筆者紹介

- 小山正文（研究顧問）
新野和暢（客員研究員 名古屋大谷高校教諭）
市野智行（客員研究員 本学非常勤講師）
木越祐馨（加能地域史研究会代表）
藤井由紀子（所員）
中川剛（客員研究員 愛知学院大学 博士課程後期）
高木祐紀（客員研究員）
小川徳水（西嚴寺住職）
工藤克洋（客員所員 京都産業大学史編纂室嘱託員）
松金直美（客員所員 真宗大谷派教学研究所助手）
脊古真哉（客員所員 本学非常勤講師）

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号

平成二十九年三月二十五日 印刷

平成二十九年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一

編集者 同朋大学佛教文化研究所

幹事 安藤 弥

電話 ○五二―四一―一三三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 株式会社 カミヤマ